六朝の招隠書翰について

――臣にならぬか――

福井佳夫

目次

はじめに
一、楊暕の「与逸人王貞書」
三、魏の招隠書翰
四、沈約の「為武帝与謝朏勅」
五、梁武帝期の招隠書翰
六、清節と寛仁
七、江淹の「為宋建平王聘逸士教」
八、平和な世の産物
九、読後感よき文学

六朝では、為政者が隠者[1]を招聘する文書がしばしばかかれた。簡単にいえば、「山林の隠所からでてきて、私の政（まつりごと）に協力してくだされ」という文書だ。これらは、天子や地方官が山林にかくれる隠者に、出仕を要請するものなので、形式的には詔令に属する文書だといえよう。

ところが、この隠者をまねく文書、なぜか詔令だけでなく、朋友のあいだで往来する書翰のジャンルでかかれることもあった。くわえて詔令として発する場合でも、実質的には書翰ふう行文で叙されることがおおい。形式上は詔令であるにせよ、その内容は丁重で、謙虚なものいいに終始しているのだ。社会的地位からみれば、発する側の為政者がずっと高位なのだが、権柄ずくに「私につかえよ」と命じるのでなく、低姿勢によびかけているのである。そのためこの隠者をまねく文書は、実態としては、隠者へむけた招聘用書翰だといってよい。したがって本稿では、詔令の類であっても招隠書翰と総称することにしよう。

私見によれば、こうした六朝の招隠書翰は、為政者がある日おもいついて、さっとかきあげたものではない。この「為政者が隠者をまねく」という行為は、旧中国の隠者尊重という気風を背景にしたもので、これ以前になが伝統を有するものである。六朝の為政者はそうした伝統を意識し、またそれに後押しされるようにして（現実的には、側近の勧めもあったのだろう）、この文書をつづったものとおもわれる。その意味で、この招隠書翰は文学史上はもとより、思想的にも興味ぶかいものといえよう。本稿は、この招隠書翰の歴史をたどり、その文学史上の意義や価値をかんがえてゆこうとするものである。

一、楊暕の「与逸人王貞書」

隋の楊暕（五八五～六一八）、あざなは世朏は、その姓からも推測できるように、隋皇室の生まれであり、かの悪名たかき煬帝こと楊広（五六九～六一八、在位六〇四～六一八）の次男としてうまれた。幼にして祖父の文帝（五四一～六〇四、在位五八一～六〇四）に愛され、容儀うるわしく、経史をまなび騎射にもたくみな才子だったという。そのためか、はやくも十代のころの仁壽（六〇一～六〇四）中に、揚州総管沿淮以南諸軍事として揚州の地に鎮し、さらに仁壽四年（六〇四）に父が帝位（煬帝）につくと、斉王に封じられた。ところが大業二年（六〇六）、二十二歳のとき、皇太子だった兄の楊昭が急逝するや、暕は我こそつぎの太子ならんとおもいこみ、驕奢な生活をおくるようになってしまった。そのため父の不信をまねいてしまい、以後は太子になるどころか、警戒され、疎外される日々を余儀なくされてしまう。そしてけっきょく隋の末年、宇文化及の乱（六一八）がおこったとき、父の煬帝ともども殺害されてしまったのである。享年三十四であった。

そうした、賢明とも思慮ぶかいとも、いいがたい楊暕であるが、一篇だけ注目すべき文章をかきのこしている。それが、本稿でとりあげる「与逸人王貞書」という書翰である。この書翰は、楊暕が「逸人」つまり隠者の王貞にむかって、自分への出仕をよびかけたものだ。いわば典型的な招隠書翰だといってよい。そこで、この楊暕「与逸人王貞書」を糸口にしながら、六朝における招隠書翰の歴史をさかのぼって通覧し、その文学史上にしめる意義や価値をかんがえてゆきたいとおもう。

まず、楊暕「与逸人王貞書」がかかれた事情を概観しておこう。この書翰をおくられた王貞なる人物は、『隋

書』の文学伝にとられているから、当時は隠者というより、文人としてしられていたようだ。彼は［いかにも文学伝のひとらしく］、わかくして経書や諸子の書をよまないものはなかった。そして詩文を得意にし、とくにその誦読をこのんでいた、という。だが成人したあとで、なぜか隠者らしくなった。本伝の記述をそのままひくと、「後に秀才に挙げられ、県尉を授けらるるも、其の好みに非ざるなり。病と謝して家に于（お）いてす」とある。つまり王貞は、せっかく秀才にあげられて任官したにもかかわらず、役人生活が性にあわなくて、病と称して家にこもってしまったのである。これ以後、彼は隠者とみなされるようになったのだろう。

そうした王貞の人生が、皇室生まれの楊暕と交差するのは、煬帝が即位してまもなくのころだったようだ。『隋書』文学伝によれば、煬帝が即位し、斉王に封じられた楊暕は江都（揚州）に鎮していたが、［隠棲する］王貞の噂を耳にして、「書を以て之を召」そうとした。そしてそのあとに、この「与逸人王貞書」を引用している。するとこの書翰がかかれたのは、おそらく煬帝が即位した大業四年（六〇四）か、その翌年ぐらいだったのだろう。このときの楊暕は、二十歳をすぎたかすぎなかったかぐらいの若者だ（王貞のほうの年齢は未詳）。兄の楊昭がまだ元気で、皇太子になれる望みはなかったが、彼なりに政務にはげんでいたのだろう。

この「与逸人王貞書」は、そうした状況のなかでかかれたのである。楊暕はおそらく、これ以前に王貞と面識はなく、ただ「すぐれた隠者がいる」という噂を耳にしていた程度だったろう。そうした楊暕だが、［後述するような］あるもくろみがあって、この招隠書翰の執筆をおもいたったものとおもわれる。以下、楊暕の「与逸人王貞書」を紹介しよう。(2)

◎夫「山蔵美玉、光照廊廡之間。是知「毛遂穎脱、義感平原。
「地蘊神剣、気浮星漢之表。「孫慧文詞、来遷東海。

顧循寡薄、籍甚清風、為日久矣、未獲披覿、良深佇遅。
有懐髦彦。

①比 高天流火、早応涼飆。
陵雲仙掌、方承清露。

②想摂衛攸宜、与時休適。
前園後圃、従容丘壑之情。
茂陵謝病、非無封禪之文。優游儒雅、何楽如之。
左琴右書、蕭散煙霞之外。
彭沢遺栄、先有帰来之作。

③余属当藩屏、宣条揚越。
坐棠聴訟、事絶詠歌。至於
攀桂摛詞、眷言高遁。
揚旌北渚、
飛蓋西園。
託乗乏応劉、
置醴闕申穆、
背淮之賓、徒聞其語、
趨燕之客、罕値其人。

卿
道冠鷹揚。
儒墨泉海、棲遅衡泌、懐宝迷邦。徇茲独善、良以於邑。
声高鳳挙、
詞章苑囿。

今遣行人、具宣往意。側望起予、甚於飢渴。想便軽挙、副此虚心。
無信投石之談、書不尽言、更慚詞費。
空慕鑿坏之逸。

◎山に蔵されていた美玉は、［とりだされると］長廊をあかるくてらしましたし、地に埋蔵された神剣も、その霊気が天の川にまでとどきました。こうした例から、毛遂の才腕が世にしられて、その節義が平原君を感服させたことも理解できますし、孫慧の文辞がひそかにとどいて［感心させ］、東海王に臣事できたのも納得できるのです。私は、自分の菲才をおもいしればこそ、俊英をしたっています。貴殿の清風のごとき名声は、すでに確立してながくなりますのに、私はまだお会いすることができず、まことにじれったく存じております。

①ちかごろ天空の心星が西にながれて、すずしい秋風に似つかわしい位置につき、雲上にそびえる仙掌の盤にも、清露がおりはじめました。

②おもうに貴殿はきちんと養生して、時候にたがわぬ日々をおすごしでしょう。前後には花壇や菜園があって、悠々と隠逸の情にしたしみ、また左右には琴や書物があって、山林の奥で気ままにおすごしでしょう。かつて司馬相如は病と称して隠居しましたが、「封禅文」をかきましたし、陶潜も官をすてましたが、「帰去来辞」をつづりました。そうした悠々自適にして儒雅なる生活、これよりたのしいことはございますまい。

③私はたまたま藩屏となって、揚越の地を管掌しております。［召公のように］甘棠の樹下で訴訟をきく日々で、詩歌を詠唱するひまもなく、［淮南小山のように隠者をおもいつつ］桂枝を手にもって文書をつづっていて、心中で隠者をしたうだけです。旗を川の北岸にたかくあげ、覆いを西園でとばすほど、馬車をはしらせますが、馬車には応瑒や劉楨のごとき文士はのっておらず、宴席には申公や穆生のごとき賢人はおりません。鄒陽のごとき才子は、ただ話にきくだけですし、燕昭王にはせ参じた賓客のごときも、ほとんどいないのです。ところが貴殿たるや、その行いは鷹よりもすぐれ、その名声は鳳よりもたかく、また学問は江海のごとくひろく、詩文も苑囿のごとく多彩です。それなのに隠棲して、あたら宝の持ちぐされ。貴殿がかく孤高をまもられているのを、私はまことに残念におもうのです。

いま使者をつかわし、私の希望をつたえさせます。私が貴殿のご指導をねがうこと、飢渇よりはなはだしいものがあります。ぜひ隠所から世にでて、わが思いにおこたえくださいませ。［そしてもし出仕されれば］ご自身の献言が無駄になるなどと心配せず、隠棲をまたねがったりなされぬよう、お願いもうしあ

げます。書翰では意がつくせず、字句をついやしただけなのを恥じております。

以上が、楊暕「与逸人王貞書」のすべてである。[3] 一読すればわかるように、この文書はただの書翰ではなく、隠者の王貞に「出仕してくだされ」と要請したものだ。こうした招隠書翰の特徴は、どうしたところにあるのだろうか。以下、気づいたことを指摘してゆこう。

第一に指摘したいことは、この文書の私的性格のつよさである。楊暕はときの天子（煬帝）の息子であり、しかもこの時点では、枢要の地の軍事司令官でもあった。いっぽう王貞のほうは、以前はともかく、この時点ではひとりの処士にすぎない。するとこのとき、楊暕が王貞に招聘の文書をおくるとすれば、「教」ジャンル（地方官が下官や民衆らにくだす告諭の文。じっさいは、地方官の命をうけた属官〈主簿など〉がつづることがおおい）でもよかったろう。ところが、楊暕は［たぶん］そうした公文書らしさをきらって、朋友間で往来する書ジャンルを選択し、書翰文としてつづったのだった。つまり楊暕は王貞への文書に、あえて私的な性格をもたらそうとしているのである。

かく書ジャンルでかかれたためだろう、この招隠書翰は、書翰ふうの三段構成に準拠してかかれている。この書翰ふうの三段構成とは、

①時候のあいさつ
②相手のようす
③自分の近況（用件）

の三部からなる構成をいう。かつて拙稿[4]でも詳論したが、こうした構成のしかたは、六朝の美文書翰でしばしば採用されるものだ。この構成に合致しないものもないではないが、それは、便宜的に変化（字句の挿入や省略、

あるいは入れかえ）をくわえたものとかんがえられ、当時の美文書翰は基本的に、この三段構成を意識してつづっていたとしてよかろう。

そうした三段構成を右の「与逸人王貞書」にあてはめてみれば、①の部分は時候のあいさつを叙したもの、②の部分は相手（王貞）の隠棲生活をのべたもの、そして③の部分は自分（楊暕）の近況と、王貞への招聘要請を叙したもの――とみなすことができる。すると、冒頭の◎の部分はどうかということになるが、その実質的内容は、③の招聘要請の先ぶれというべき故事提示であり、いわば基本の三段構成のうえに、付録ふうに付加された字句だといえよう。つまりこの◎の部分が、右でいう「便宜的に変化をくわえたもの」（この場合は字句を挿入したもの）に相当するわけだ。こうかんがえるとこの楊暕書翰も、三段構成を基本とし［それに多少の変化をくわえ］たもので、六朝の書翰スタイルに準じているといってよかろう。[5]

楊暕の招隠書翰は、こうした三段構成をとることによって、公文書でなく私的書翰にちかづいたものとなった。とくに②相手のようすでは、「おもうに貴殿はきちんと養生して、時候にたがわぬ日々をおすごしでしょう」云々とのべて、相手にかたかけるような雰囲気をもたせている。こうした叙しかたは、私的な性格をつよめ、［朋友への書翰のごとき］親近感を醸成しようとするものであり、おそらく意図した叙法だったのだろう。

楊暕「与逸人王貞書」で指摘したいことの第二は、王貞に対する姿勢が謙虚だということである。楊暕は、まず◎の冒頭において、「貴殿の清風のごとき名声は、すでに確立してながくなりますのに、私はまだお会いすることができず、まことにじれったく存じております」と低姿勢にかたりかける。そして③において、「貴殿たるや、その行いは鷹よりもすぐれ、その名声は鳳よりもたかく、また学問は江海のごとくひろく、詩文も苑囿のごとく多彩です」とたたえる。かく王貞の才能を大仰に称賛し、それなのに隠棲されているのは残念だとのべたう

えで、「私が貴殿のご指導をねがうこと、飢渇よりはなはだしいものがあります。ぜひ隠所から世にでて、わが思いにおこたえくださいませ」と、丁重に出仕を懇請するのである。この楊暕書翰、客観的にみれば、有力な地方官（しかもロイヤルファミリーの成員である）が処士をとりたててやろうというのだから、「登用してやるから感謝せよ。しっかりはげめよ」でもよい。だが、作者の楊暕はそうした高圧的な態度をとらず、謙虚な姿勢で一貫しているのである。

こうした謙虚な姿勢も、招隠書翰の特徴のひとつだ。それは、当該の文書が書翰であろうと詔令であろうと、基本的にかわることがない。これはおそらく旧中国で弥漫していた、隠者尊重の気風と関係するものだろう。ふるい中国では、為政者は低姿勢でもって、隠者や高士に出仕をよびかけるべきだ。それが政（まつりごと）をなす者の責務であり、それでこそ世人から尊敬をうけるのだ――という考えが存していたのである（後述）。

楊暕「与逸人王貞書」で指摘したいことの第三は、隠者を説得する論理の奇妙さである。すなわち、楊暕は隠者の隠逸行為を価値あるものとみとめながら、それでもまげて出仕してほしいと要請している。これは奇妙だし、矛盾した論理だといわねばならない。だが、そうしたくるしい論理で隠者を招聘するのが、この招隠書翰の定式なのである（だからこそ低姿勢になるわけだ）。

じっさいこの楊暕書翰でも、楊暕は王貞の隠逸を、けっして価値なきものとしていない。彼は書翰中で、

②おもうに貴殿はきちんと養生して、時候にたがわぬ日々をおすごしでしょう。前後には花壇や菜園があって、悠々と隠逸の情をたのしみ、また左右には琴や書物があって、山林の奥で気ままにおすごしでしょう。かつて司馬相如は病と称して隠居しましたが、「封禅文」をかきましたし、陶潜も官をすてましたが、「帰去来辞」をつづりました。そうした悠々自適にして儒雅なる生活、これよりたのしいことはございますまい。

とかたっている。王貞の隠逸を「悠々自適にして儒雅なる生活」だとたたえ、「これよりたのしいことはございますまい」と是認しているのに注意しよう。楊暕は、かく隠逸の意義をみとめたうえで、それでも「貴殿のご指導をねがうこと、飢渇よりはなはだしい」ので、まげて隠所をでて、わが官府へ出仕してほしいと懇請しているのである。こうした奇妙で矛盾した論理を、親近感ある呼びかけや謙虚な姿勢で弥縫しつつ出仕を要請してゆくのが作者の腕の見せどころだったのだろう。

以上が、招隠書翰としての楊暕書翰の特徴である。招隠書翰は基本的に、こうした三つの特徴をもっているといってよい（ただし詔令ジャンルでかいた場合は、私的性格がつよいという特徴はうすれてくる）。さらに、これとはべつに、行文が典型的な四六駢儷の美的文章でかかれていることも、この作独自の特徴としてあげておこう。美文でかかれるのは、この時期の書翰文であればとうぜんのことといってよいが、この楊暕書翰はとくにレベルがたかいのである。

まず、対偶と四六句の多用は一目瞭然だろう。対偶を構成する句は、全六十二句中の四十句で全体の65％。また四字句は五十句、六字句は八句で、これをあわせた四六句の割合は、全体の94％にもおよぶ。さらに全部で十三聯ある対偶（隔句対もふくむ）のうち、十一聯の84％において、両末字の平仄を「○↕●」のように対応させている。これら修辞の洗練ぶりは、じつに卓越したものだ。南朝の斉梁のころの美文とくらべても、まさるともおとらぬものといってよかろう。

清の許槤は自身の『六朝文絜』に、この楊暕書翰を収録したうえで、

此書猶是六朝賸馥、取其疏鬯磊落。宋人四六宗風、実開於此。

この書翰文は六朝の残香をただよわせている。その暢達でおおらかなところは、みならうべきだ。宋人の

四六重視の風格は、ここから開始されたのだろう。

と評している。この評言のうち、「疏豁磊落」（暢達でおおらか）がなにをさすのかわからぬが、「六朝賸馥」（六朝の残香をただよわす）や「四六宗風、実開於此」（四六重視の風格は、ここから開始されたのだろう）は、行文の整斉ぶりをたたえたものだろう。私見によれば、この評言にふさわしい字句として、

「茂陵謝病、非無封禪之文、
彭沢遺栄、先有帰来之作。」

があげられるのではないか。この四句は美文で理想的だとされる、上四下六の隔句対（軽隔対とよばれる）を構成している。しかも声律をととのえ、司馬相如と陶淵明の典故までふまえており（注2参照）、理想的な美文ふう整斉をしめすものだといえよう。

二、招隠の風

「与逸人王貞書」の作者、楊暕はときの天子煬帝の次男である。そんな高貴な人物が、一介の隠者たる王貞に、こんな丁重な招隠書翰をおくっているのだ。こうした行為の背後には、隠者を尊重し自分の官府にまねこうとする、旧中国独特の気風が存している。以下、その気風についてかんがえてみよう。

中国にはふるくから、「野に遺賢なし」（『尚書』大禹謨）をよしとする考えかたがあった。為政者はひとりで天下をおさめることはできず、どうしても賢人の補佐が必要だ。だから野にいる賢人を朝廷に招聘し、政治に協力してもらおう、というわけである。こうした考えかたは、天下に一大事が出来したときに、とくに強烈に意識

された。たとえば災異思想（君主に失政があれば、天が災禍や異変をくだして譴責する、という思想）がはやった両漢のころ、地震や日蝕が発生するたびに、天子はおのれの至らなさを反省した。そして、政治を刷新すべく賢人をもとめる詔勅、つまり求賢詔を発して、「野にいる賢人を推挙して、朕の政（まつりごと）に協力させよ」と命じたのだった。この野にいる賢人のなかに、とうぜん隠者もふくまれる。その意味で招隠は、ひろく求賢の一環だったとかんがえてよかろう。(6)

だが隠者の招聘は、賢人一般の招聘とは、すこし意味あいがことなっていたようだ。どうちがうのか。以下、隠者論がさかんだった両晋期の資料によりながら、このあたりを説明してゆこう。(7)

まず、隠者の招聘も賢人一般の招聘も、政治的貢献を期待してのものだったという点では、基本的におなじだといってよい。ただ賢人は、あくまで実際的な政治手腕が期待されていたのに対し、隠者のほうは、道義的な教化のほうが想定されていたようだ。たとえば西晋の資料に、

○［皇甫謐高士伝序］高譲之士、王政所先、厲濁激貪之務也。

高尚な隠者は、天子の政治においては、まず優先すべき人びとである。彼らは、世の汚濁をきよめ貪欲をしずめることを、おのが任務としているのだ。

○［抱朴子逸民］在朝者陳力以秉庶事、山林者脩徳以厲貪濁。殊塗同歸、俱人臣也。

朝廷につかえる賢人は力をつくして政務に従事し、山林にひそむ隠者は徳をおさめて世の汚濁をきよめる。事がらはちがっても、帰するところはおなじで、ともに臣僚というべきである。

などとある。これらでいう「世の汚濁をきよめ貪欲をしずめる」や、「徳をおさめて世の汚濁をきよめる」などは、実際的な政務というよりも、道義的な教化や精神的な陶冶のほうにかたむいている。とくに『抱朴子』逸民

の発言は、朝廷につかえる賢人（在朝者）と山林にひそむ隠者（山林者）とのあいだには、明確な役わり分担（「秉庶事」と「厲貪濁」）があったことをうかがわせる。つまり隠者という存在は、政務をとるひとでなく、道義をかたるひとなのである。[8]

では、朝廷にいる賢人と山林にいる隠者とは、役わりがことなるだけで、対等の立場だったのかというと、そうではない。隠者がもたらす道義性は、通常の賢人がなす実際的な政治実務よりも、ずっと重要で、すばらしいものだとかんがえられていた。いわば隠者のほうが、格上だったのである。葛洪はそのへんの事情を『抱朴子』博喩で、

四霊翳逸而為隆平之符、幽人嘉遁而為有国之宝。何必司晨而銜鑣、羈紲於憂責哉。

四霊（龍、亀、麒麟、鳳凰）は目にみえなくても、やはり盛世の符瑞であり、隠者は世をさけ隠遁していても、やはり国の宝なのである。鳳凰に夜明けをつげさせ麒麟に轡をかませ、さらに隠者を雑務にしばりつける必要など、どうしてあろうか。

とかたっている。葛洪はやはり対偶をもちいつつ、隠者を麒麟や鳳凰になぞらえ、それとおなじ国の宝であると断じる。そんな国の宝に、こまごました政務などやらせるわけにゆかぬ。それは、あの鳳凰にときをしらせたり、麒麟に鋤をひかせたりしようとするのとおなじだ、という。これ以上ない称賛のことばだといえよう。

かく隠者が麒麟や鳳凰に比され、賢人より格上の存在だとすれば、とうぜん為政者は隠者に敬意をはらわねばならない。そもそも、いにしえの先王たちでさえ、隠者の存在をきちんとみとめ、高貴な存在として称賛してきたのだから。こう主張するのは、葛洪と同時代の李重である。彼は「請優礼朱沖疏」という上疏文のなかで、

凡山林避寵之士、雖違世背時、出処殊軌。而先王許之者、嘉其服膺高義也。

いったい山林にかくれひそむ隠者は、世にそむき時勢に背をむけ、その出処進退は常人とはことなっている。だがそれでも、先王は彼らの存在をゆるし、高節を保持するのをたたえたのだった。

という。偉大な先王でさえ、「彼らの存在をゆるし、高節を保持するのをたたえた」のであれば、現今の為政者にあっては、それ以上の丁重さで接さねばならないわけである。

そうした考えかたのもと、隠者の招聘に熱心だったのが後漢の天子たちだった。[9] 後漢は、范曄がはじめて正史『後漢書』に逸民伝をたてたように、隠者の存在がクローズアップされ、重視された時代である。そのせいか、どの天子も熱心に隠者をまねこうとしたのだが、なかでも積極的だったのが、初代天子の光武帝である。『後漢書』逸民伝には、つぎのようなエピソードをのせている。光武帝は、青年期に同門でまなんだ、隠者の厳光をさがしていた。ある日、斉の沢のなかで、釣りをしている男がいるという報告があった。すると彼は、「其れは[厳]光ならんかと疑い、乃ち安車と玄纁（げんくん）とを備へて、使を遣して之を聘（と）わし」めた。かくして厳光は都にでてきたが、それでも光武帝にあおうとしない。そこで光武帝は、みずから厳光の宿舎まで足をのばし、ふたりで大要つぎのような会話をかわしたという。

帝「おい子陵（厳光のあざな）よ。わしをたすけて政（まつりごと）に協力してくれぬか」。

光「むかし堯は徳がたかかったが、それでも巣父（許由のあやまりか――福井）は[天子の地位をけがらわしいといって]耳をあらったそうな。士には志というものがあるのじゃ。どうして、そんな難題をわしにいいつけるのか」。

帝「子陵よ。わしはそなたに出仕してもらうことは、かなわぬようじゃな」。

厳光は筋金いりの隠者だったようだ。光武帝がこれほど熱心にまねいても、朝廷に出仕することを応諾しなかっ

たのである。出仕を拒否された光武帝は、「輿に升り歎息して去」ったという。なお、右の逸話において光武帝は、安車（安楽な馬車。ゆれないよう蒲葉で車輪をつつんだので、蒲車や蒲輪ともいう）と玄纁（贈物用の絹）とを用意して、使者を派遣していることに注意しよう。この安車と玄纁とは、隠者をまねくときの必須の道具だてであり、これ以後も、隠者招聘の場面でしばしば登場してくる。

もうひとつ後漢の事例、こんどは、くだって三代目の章帝が建初五年（後八〇）に発した、「日食挙直言極諫詔」という詔をあげてみよう。これは、日食や旱魃の頻発におののいた章帝が、おのれの至らなさを反省して発した詔である。

朕新離供養、愆咎衆著、上天降異、大変隨之。詩不云乎亦孔之醜。又久旱傷麦、憂心慘切。公卿已下、其挙直言極諫、能指朕過失者各一人、遣詣公車、将親覧問焉。其以厳穴為先、勿取浮華。

朕はあらたに［馬皇后の死により］庇護をうしない、失政の咎がおおく出現した。天は災異をくだし、日蝕の異変がつづいた。『詩』に「じつにひどいことだ」というが、そのままの事態だ。そのうえ旱魃により麦も害をこうむり、私の心は憂いにつつまれている。公卿已下はおのおの、朕に、きちんと諫言し、過失を指摘できる者一人を推挙し、官府につれてきてくれ。朕がみずから質問してみたいのじゃ。そのさいは厳穴の士を優先し、浮華な連中は推挙してはならぬぞ。

これは、両漢におおく発せられた求賢詔（先述）のひとつである。ここで章帝は、日蝕や旱魃による災異は、自分の至らなさに原因があるとして、朕の過失を指摘できる人物を推挙せよ、と臣僚に命じている。いわば天下にむかって、政治の指南役を推薦してほしい、とおおやけにしたわけだ。こうした謙虚かつ率直な表現が、求賢詔の特徴なのである。

この詔で注意したいのは、「そのさいは巌穴の士を優先し、浮華な連中は推挙してはならぬぞ」ということばである。なぜ章帝は巌穴の士、つまり山中の洞穴にすむ隠者を優先させたのか。それは、やはり天がくだした災異に対しては、浮華な連中はもとより、通常の賢人ではとても対応しきれない。こうしたときは、道義のひとである隠者によって政治を刷新し、天の怒りをしずめねばならぬ――とかんがえたからだろう。浮華な連中でなく、きよらかな隠者こそ、それが可能だというわけである。こうしたところにも、旧時における隠者へのつよい尊崇の情がうかがえよう。

では、かく丁重に招聘される隠者のほう、彼らは、そうした為政者の招聘に応じたのだろうか。結論をいえば、応じた者もいたし、応じなかった者もいたのである。「隠者なのだから、応じないのではないか」「応じないからこそ、隠者なのではないか」とおもわれるかもしれない。だが意外なことに、応じた［そしてその結果として、隠者と称せられなくなった］者もけっこういたのだった。

そもそも隠者といえば、道家思想の支配下にあるようにおもわれやすい。もちろん、それは誤りではないが、出処の問題に限定すれば、彼らの心奥には、むしろ儒家ふうの「明哲保身」（事がらを適切に処理して、安全に身をたもつ、の意）の道さえ保障されれば、出仕も可という考えが存していたようだ。なかでも招隠にかかわるような隠者は、自分を招聘しようとする為政者に対して、［道家ふうの］ラディカルな拒否的態度をとることはなかったし、ましてや、反乱をおこすような不逞のやからでもなかった。彼らの考えかたは、

天下に道有れば則ち見われ、道無ければ則ち隠る。

という『論語』泰伯のことばや、

窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす。

という『孟子』尽心上の発言（こうした字句は、招隠の文書にもよく引用される）にちかいものだった。つまり彼らのおおくは、「なにがなんでも仕官するのはいやだ。どうしても山にこもるんだ」という先鋭的な隠者ではなく、条件さえととのえば、出仕もやぶさかではないという、柔軟性をもった人びとだったのである。

そうした儒教ふう明哲保身の考えにたちつつ、さまざまな隠者がさまざまな個性にもとづいて、さまざまな出処進退をおこなってきた。そうしたなかから、招隠に応じなかったケース、招隠に応じたケースについて、それぞれ著名なものを紹介してみよう。

まず応じなかったケースとして、「許由洗耳」の伝説があげられよう。それは、堯帝が天下をおさめていたときのこと、堯は許由というひとの清節を耳にし、天子の地位をゆずろうとした。すると許由は箕山へにげてゆき、「けがらわしいことをきいた」といって潁水の流れで耳をあらった――という話柄である。この話柄の関鍵の部分を、『古今楽録』にひかれた記事（『太平御覧』巻五七一所引）で紹介すれば、

以清節聞於堯、堯大其志。乃遣使以符璽、禅為天子。於是許由喟然歎曰、「……」。使者有愧、還以状報堯。堯知許由不可動、亦已矣。

許由が清節だという評判がきこえるや、堯帝は彼の志をたかく評価した。そこで堯は使者に印璽をもたせて派遣し、天子の地位を許由にゆずろうとした。すると許由はため息をつき、なげいていった。「……」。これをきいて使者ははずかしくおもい、帰還して堯に顛末を報告した。堯は許由の決心をかえさせられぬことをしり、帝位の禅譲をとりやめることにした。

というものだ。この伝説、出典（最古の典拠は『荘子』逍遙遊）によって細部がすこしずつことなっているが、「為政者（＝堯）が隠者（＝許由）にむかって、世にでる（＝帝位をゆずる）ことをうながす」という骨格部分

は、ほぼ共通している。この話は、［儒家や道家をとわず］いろんな書に引用されていて、隠者の伝説としてはもっとも有名なものといってよかろう。

ただこの話、現在の立場からみると、いささか奇妙なところがないでもない。右の話によると、堯帝は許由の「清節」という評判をたかく評価して、帝位の禅譲をおもいついたという。「政治的に有能だ」という評判をきいたのなら、堯が帝位をゆずろうとしたのも理解できる。だが「清節」なる徳目は、俗世を忌避しようとする、きよらかな節操のことだ。ところが帝位なる地位は、［清節とは正反対の］汚辱にまみれた俗世の最高位である。すると、その清節さをたかく評価しながら、俗っぽい帝位をゆずろうというのは、矛盾した要請だというべきだろう。ダイエットにはげんでいる男に、「あまいドーナツをくえ」とせまるようなものだ。その意味では、むしろ意地のわるい要請だというべきであり、許由が拒否したのも、とうぜんのことといわねばならない。

もっとも、こうした古伝説に難癖をこねてもしかたがない。これはおそらく、

清節　↓　志がりっぱ　↓　人格が廉潔　↓　天子にふさわしい

という考えかたに、もとづいているのだろう。つまりこの伝説は、ふるくから隠者の意義や価値が［天子の地位にふさわしいとされるほど］たかく評されていた、ということを示唆しているのだとおもわれる。

そしてさらに注目したいのは、こうした堯帝の要請は、後世の招隠書翰の論理とよく似ていることだ。それは、清節（＝隠逸）を価値あるものとみとめながら、「それでもまげて出仕してほしい」と要請してゆく、奇妙で矛盾した論理である（楊暕書翰もこの論理をとっていた）。招隠書翰の特徴というべきこの奇妙な論理は、この古伝説あたりに起源があったのだろう。

こうして許由は、「天子の地位をゆずりたい」という堯帝の要請を拒否した。そしてその毅然たる拒否によっ

て、清節ぶりをたかめることができた。また堯帝も許由の意志を了として自由にさせ、いかにも聖天子らしい器量のおおきさをしめしたのだった。許由もりっぱだが、それを許容した堯帝もまたすばらしい、というわけである。これによって後世、道教の側は、隠逸の意志をつらぬいたとして許由を、いっぽう儒教の側は、寛仁な心で許由をゆるしたとして堯帝を、それぞれたかく称賛するようになったのだった。

つぎに、招隠に応じたほうの代表として、四皓（しこう）をあげよう。四皓とは、秦末漢初の乱世をさけて、商山に隠棲していた四人の隠者（東園公、綺里季、夏黄公、甪里（ろくり）先生）のことである。四人とも八十余歳の老人で、鬚眉が皓白（まっしろ）だったので、四皓とよばれたという。

ときに、天下を平定した漢の高祖こと劉邦は、正妻の呂后の子、劉盈（後の恵帝）を太子の地位からおろし、そして戚夫人の子を太子にしたいと念じていた。これをおそれた呂后は、張良の知恵をかりて、卑辞厚礼（うやうやしい言辞と丁重な儀礼）でもって四皓を招聘し、太子に出仕させるのに成功したのである。やがて劉邦は、［自分が招聘できなかった］四皓が、太子につかえていることをしった。そして、この四皓が補佐している以上、劉盈を廃することはできないとさとり、太子の改廃をあきらめたのだった。

この話で注目したいのは、四皓が太子の招聘に応じたことが、劉邦にとって決定的な重みをもっていたということである。つまり漢初において、為政者（ここでは劉盈）が隠者を招聘することが現におこなわれており、そしてその招聘成功が、重要な效能（ここでは太子の地位の保証）をもたらしたのだ。これによって、隠者を招聘することは、明君（ここでは明太子）のあかしであり、その政治的地位を担保することにもつながってくることがわかってこよう。

四皓の話は、『史記』留侯世家に記録されているので、それなりに信用してよい。もちろん、この話柄は誇張

された伝承にすぎず、現実的には、たかだか四老人の動向が、それほど政治的に重要だったはずがない、という見かたもできなくはない。だがそうだとしても、司馬遷がこうした古伝承を見聞し、それを史実とみなして『史記』のなかにかきこんだのは、たしかな事実なのだ。そうであれば、隠者や隠者を招聘することは、ときの政治の動向とけっして無関係ではなかったことが推察できるのである。

以上、為政者の招聘に応じたケースと応じなかったケースとをあげてきた。これを要するに、出仕を要請されたとき、隠者の出処はさまざまだったといってよい。招聘に応じて名をあげたものとして、右の四皓のほかに、太公望や諸葛亮、謝安などがおり、がんとして応じなかったものに、許由以外に、巣父や長沮桀溺、伯夷叔斉などがいる。どちらが上というわけではないが、招聘に応じたほうは、隠者としての知名度がうすまり［というよりも、ほとんどわすれられ］、能臣や軍師としてのイメージがつよくなるのはやむをえない。また応じなかったほうは、そのまま山林のなかにかくれてしまった。結果、清節の隠者として名をのこした者もいたが、おおくは歴史のかなたにきえていったのだった。

三、魏の招隠書翰

招隠の風を概観してきたが、では本稿のテーマである招隠書翰は、いつごろから発生してきたのだろうか。これは、早期に発生していたと想像されるが、じっさいの作例はというと、なかなかみつけにくい。たとえば、さきに紹介した漢初の四皓招聘の場合では、張良の知恵をかりた呂后は、つぎのようなことをおこなったという。

使人奉太子書、卑辞厚礼、迎此四人。

使いの者に太子の書翰をもたせ、うやうやしい言辞と丁重な儀礼でもって、この四人の隠者を招聘させたのだった。

この記述（『史記』留侯世家）によると、呂后が［招聘にゆかせた］使いの者に、太子名義の書翰（じっさいは呂后らがかいたのだろう）をもたせたことは、まちがいない。それがたぶん招隠書翰に相当するのだろうが、残念ながら、その文じたいは現存していない。他もこれとどうようで、天子が隠者甲を招聘し、諸侯が高士乙をまねいたという記事は、史書に頻見はするのだが、招聘のとき使いの者にもたせたはずの招隠書翰［の文辞］までは、引用していないのである。おそらく、記録にあたいするほどの文でなかったので（たぶん「なんじを○○の官と為す」ぐらいの、簡略なものだったのだろう）、史家は引用しなかったのだろう。

そうしたなか、六朝期になると、為政者が招聘をよびかけた文書が、ぼつぼつ史書等に引用されてくる。本格的な文書として、魏の明帝が隠者の管寧によびかけた「下管寧詔」を紹介しよう。

この管寧（一五八～二四一）は青州北海郡のひとで、隠者にして学者でもあった。後漢末の戦乱をさけて遼東に避難し、そこにながくすんでいた。やがて魏朝が成立するや、管寧は魏文帝の招きに応じて海路で故郷にかえった。だが、太中大夫に任じるという文帝の招聘に応じず、魏廷には出仕しなかった。やがて文帝にかわって明帝（在位二二六～二三九）が即位するや、帝はふたたび管寧をまねき、こんどは光禄勲に任ずる旨の「下管寧詔」をくだしたのだった。この明帝の詔こそ、［書翰ではないものの］楊暕「与逸人王貞書」の先蹤にあたる招隠の文書だといってよかろう。では、それを引用してみよう。

太中大夫管寧、「耽懐道徳、「清虚足以侔古、
「服膺六芸、「廉白可以当世。

曩遭王道衰缺、浮海遁居、大魏受命、則襁負而至。斯蓋┌応龍潜升之道、
└聖賢用舎之義。
而黄初以来、徴命屢下。毎輒辞疾、拒違不至。豈朝廷之政、与生殊趣、将安楽山林、往而不能反乎。夫以姫公之聖、而耆徳不降、則鳴鳥弗聞。以秦穆之賢、猶思詢乎黄髪。況朕寡徳、曷能不願聞道于子大夫哉。今以寧為光禄勲。礼有大倫、君臣之道、不可廃也。望必速至、称朕意焉。

太中大夫の管寧よ。貴殿は道徳を思いをはせ、六経を心にきざみ、淡泊さは古人にならび、廉潔さは当代にふさわしい。さきに王道が衰微したとき、貴殿は海路によって［遼東に］かくれうつったが、わが大魏が天命をうけると、幼児を背おって故郷へかえってきた。おもうに、これは応龍が水中にひそんだり天にのぼったりするのと、そして聖賢が［時世に応じて］出処をきめるのと、おなじことだろう。

ところが［わが大魏の］黄初のとき以来、招聘の令を再三くだしたが、貴殿は毎回病気を理由にして、出仕をこばんでこられた。わが朝の政治が、貴殿の意向と一致しないので、山林で隠棲する日々をたのしみ、宮中にかえる気をなくされたのだろうか。そもそも周公の聖徳さをもってしても、有徳の長老の協力がなければ、鳳凰の鳴き声もきかれなかったし、秦穆公の賢明さをもってしても、白髪の老人に相談したいとねがったものだった。いわんや朕は徳とぼしき身だ。どうして貴殿のごとき大夫に、道理をたずねたいとおもわぬはずがあろうか。

いま、なんじ管寧を光禄勲に任命しよう。礼にはなすべき規範が存するが、君臣の道こそ廃してならぬものじゃ。すみやかに朝廷にお越しいただき、朕の願いにこたえてくださるように。

これが魏明帝の「下管寧詔」のすべてである。この作を楊暎「与逸人王貞書」と比較しながら、文章の性格を

かんがえてみよう。楊暕書翰の特徴をふりかえっておくと、第一に私的性格がつよい、第二に謙虚な姿勢で一貫している、第三に隠逸の価値をみとめながら、それでも仕官を要請するという奇妙な論理をとっている――の三点だった。こうした点、魏明帝の詔はどうだろうか。

まず第一については、明帝の文書は書翰でなく、天子がくだす詔の形式をとっているので、楊暕書翰にくらべると、私的な性格はとぼしいといってよい。［書ジャンルでないので］三段構成でかかれていないし、かたりかけるような雰囲気も、とうぜんながらみられない。やはり詔勅の文ともなると、親近感よりも威厳をもとめられるので、ある程度はしかたがないといわねばなるまい。

ただ、つぎの第二については、詔という公的な文書ではあっても、謙虚な姿勢をとろうとしているのがよくうかがえる。たとえば、詔中の「朕は徳とぼしき身だ。どうして貴殿のごとき大夫に、道理をたずねたいとおもわぬはずがあろうか」あたり。ここには、明帝の謙虚さぶりがよくうかがえる。また「さきに王道が衰微したとき、貴殿は海路によって［遼東に］かくれうつったが」云々や、「［わが大魏の］黄初のとき以来、招聘の令を再三くだしたが、貴殿は毎回病気を理由にして、出仕をこばんでこられた。わが朝の政治が、貴殿の意向と一致しないので、山林で隠棲する日々をたのしみ、宮中にかえる気をなくされたのだろうか」の部分。これらの発言は、管寧の個人的な事情や意向をよく斟酌したものだ。かく管寧の過去の不出仕をとがめていないところに、明帝の慎重な配慮をよみとることができよう。

また、第三の奇妙な論理も、この明帝の詔には健在だ。管寧の従前の不出仕を「応龍が水中にひそんだり天にのぼったりするのと、そして聖賢が［時世に応じて］出処をきめるのと、おなじこと」と許容しながら、それでも朕は徳とぼしき身なので、「すみやかに朝廷にお越しいただき、朕の願いにこたえてくださるように」と出仕

を要請している。こうした矛盾した招隠の論理も、楊暕書翰と共通したものである。

いっぽう、美文ふう行文という点では、この詔は楊暕書翰より明確におとっている。詔の文章は、おおきく「命令の根拠をしめす部分」と「命令をくだす部分」とにわけられ、前者に文学的な装飾がくわえられることがおおい。[10] この詔でいえば、冒頭から「おもわぬはずがあろうか」までが前者である。この部分には対偶が三聯つかわれているが、当時の政治的文書としては、通常の装飾レベルというべきであり、それほどこった行文とはいえない。まして楊暕書翰にくらべれば、ずっと散句（とくに後半）がおおくて、美文とはいいがたいものだ。さらに、「以姫公之聖」云々と「以秦穆之賢」云々とは、内容的に対偶にできたはずだが、散句のままにしている。こうしたところは、対偶意識の希薄さをうかがわせるものだ。それゆえ、「下管寧詔」の文章に関しては［たぶん当時の時代的制約もあって］、それほど卓抜した美文ではないといってよかろう。

以上、魏明帝の「下管寧詔」について検討してきた。この作は［現存する］招隠書翰として初期のものであり、完成形というべき楊暕「与逸人王貞書」にくらべると、いろんな点で不じゅうぶんなものである。ただ謙虚な姿勢という点では、きちんと過去の求賢詔の伝統を継承しており、楊暕の招隠書翰へつながるものだと称してよかろう。為政者が隠者を招聘するさいには、この謙虚な姿勢がいちばん重要だとかんがえるが、時代がはやい「下管寧詔」においても、その点はしっかり保持している。その意味で、この詔は過去の求賢詔の精神をよくまなび、その伝統にそいつつ、謙虚な行文をつづったものといってよかろう。

ところで、右は招隠書翰の内実にかかわる点をみてきたのだが、ここでもうひとつ、外的な特徴も指摘しておこう。それは、招隠書翰は概して平穏な時期にかかれる傾向がある、ということだ。いっぽんに、隠者という存在は、戦乱の時代におのが命をまっとうしようとして、あるいは自分の理想や節義をつらぬこうとして、緊急避

難的に発生してきた経緯がある。[11] ところがこの招隠書翰は、隠者にかかわる文章ではあっても、逆に戦乱がおさまった平和な時期に、おおく発せられてきた。というのは、為政者が山林や巌穴にひそむ隠者をさがしだし、自分につかえてほしいと要請するなどということは、群雄が覇をきそう戦乱の時期でなく、平和な時代にこそ、ふさわしい行いであるからだ。道義的な教化や精神的な陶冶を得意とする隠者は、やはり平和な時期、とくに新王朝が樹立したときなどにこそ、その存在が想起され、珍重されてくるものなのだろう。

そうした目でみたとき、この明帝「下管寧詔」も、また楊暕「与逸人王貞書」も、平穏な時期にかかれたものであることに、あらためて気づく。楊暕書翰は隋王朝が安定したころの作だったし、この明帝詔がかかれた時期も、平穏さがたもたれていた。明帝のころは、三国の抗争も後半にはいっており、蜀や呉の抵抗はなおつづいていたものの（諸葛亮の没年は二三四年）、大局的にみて魏の優勢はうごかなかった。詔中で「さきに王道が衰微したとき、貴殿は海路によって［遼東に］かくれうつったが」云々とあったが、「王道が衰微した」のはもはや過去であり、いまはそうではないという言いかたに留意しよう。だからこそ、遼東に避難していた管寧も、幼児を背おって故郷へかえってきているのである。

六朝で平和がながくつづいた時期といえば、梁の武帝の治世が想起されるだろう。そうである。六朝の招隠書翰は、この梁武帝の治世（とくに即位まもないころ）においてこそ、たくさんかかれているのである。[12] 名篇というべき作も、この時期におおい。平和な時代と招隠書翰の盛行とは、やはり並行関係にあるのだろう。つぎの節では、そうした梁武帝期の招隠書翰をみてゆくことにしよう。

四、沈約の「為武帝与謝朏勅」

梁武帝期にかかれた招隠書翰としては、つぎのようなものがある。梁武帝「与何胤書」「又与何胤書」、沈約「為武帝与謝朏勅」、蕭統「与何胤書」などである。これらの作、為政者自身が筆をとったものもないではないが、当時はその周辺にいた側近たちが代作するのがふつうだったろう（注3も参照）。後世、なんらかの事情で代作者が判明した場合に、はじめて真の作者名が冠せられるようになり、標題も「為武帝」（武帝の為に）などの字句が追加されるようになるわけだ。

これら武帝期の招隠書翰のなかから、いちばんの名篇をえらべといわれれば、沈約が武帝のために代作した「為武帝与謝朏勅」をあげるのが、まずは妥当なところではあるまいか。この作は、梁朝を樹立してまもないころの武帝が、高士[13]の謝朏（しゃひ）（四四一～五〇六）を招聘せんとして、側近の沈約につづらせた招隠書翰である。その沈約の作をみてみよう[14]。

吾以菲徳、属当期運。鑒与吾賢、思隆治道。而明不遠燭、所蔽者多。実寄賢能、匡其寡闇。
嘗謂「山林之志、上所宜弘。」「自居元首、
「激貪厲薄、義等為政。」「臨対百司。」
雖復「執文経武、各修厥職、」而「鎮風静俗、自非箕潁高人、莫膺茲寄。」
「羣才競爽、以致和美、」「変教論道。」

是用「虚心側席、不得不「屈茲独往、便望「釈蘿襲袞、
「属想清塵。「同此濡足。「出野登朝。
必不以「湯有慙徳、「不降其身、使「璧帛虚往、傾首東路、望兼立表。
「武未尽善、「不屈其志。「蒲輪空帰。
羲軒邈矣、古今殊事。不獲総駕崆峒、依風問道。今方復「引領雲台、紆賢之愧、載結寝興。
「虚己宣室。

私は不徳でありながら、天運にめぐまれて践祚することができた。朝廷の賢人とともに前往をかんがみながら、治道をすすめてゆきたいと念じている。ただ私は不明にして、いたらぬことがはなはだおおい。そこで賢能の士によって、私の愚昧さをただしてほしいのだ。

私はかねてより、山林にかくれんとする隠者の志は、上にたつ者の尊重すべきことだし、貪婪さをおさえ軽薄さをただす隠者の行いは、経世に匹敵するとおもっていた。そうした私が天子となって、百官に対することになった。朝廷の文武の士たちは、きちんとおのが仕事に専念し、才幹すぐれし俊英は、よい治績をあげてくれている。しかし民衆の風俗をあらため、教化の実をあげるためには、山林にひそむ高士でなければまかせられぬ。

そういうわけで、私は虚心もて貴殿のお越しをお待ちし、清高なお姿をしたっている。ついては、貴殿の隠棲したい気もちをまげ、私とともに泥にまみれていただかざるをえないのだ。私は貴殿が粗服をぬいで朝服に着がえ、山林をでて朝廷においでくださるのを切望しているのである。

湯王の徳にも欠けたところがあったとか、武王も最善とはいえぬ［ように、この私にも欠点がある］など

として、山林からでてくるのをいやがったり、隠逸の志をつらぬくことのないよう、せつにお願いしたい。

[私の微意を表した]玉や絹を無駄にしたり、蒲輪の馬車をむなしくかえらせぬように。私は東路にたって貴殿のお出ましをあおぎみつつ、いまかいまかとお待ちつづけているのだ。

伏羲や黄帝はとおい過去となり、古今はすっかりちがってしまった。もはや黄帝のように馬車で崆峒にでかけ、広成子をしたって道をたずねるわけにもゆかぬ。いま私は朝廷で貴殿のお越しを鶴首し、公署でひたすらお待ちしている。隠者をわずらわせることに、朝夕恐縮の気もちを感じながら。

この作は、詔令の一種たる勅ジャンルでかかれている。ただ勅は、天子がくだす一方的な命令というより、劉勰が「勅は、州や郡の属官をいましめる文書である」(原文「勅戒州部」)というように(『文心雕龍』詔策)、こんこんといましめる文書だったようだ。そのせいもあるのだろうか、この「為武帝与謝朏勅」の行文には、あまり詔令ふうのかたぐるしさは感じられない。

この文、書翰文ではないので、三段構成ではないし、時候のあいさつもない。だが[「朕」でなく]「吾」の一人称をつかって、謙虚に隠者によびかける姿勢は健在だ。たとえば「不明にして、いたらぬことがはなはだおおい」「賢能の士によって、私の愚昧さをただしてほしい」などは、招隠の文書らしい低姿勢なことばである。さらに「東路にたって貴殿のお出ましをあおぎみつつ、いまかいまかとお待ちつづけている」という発言も、謝朏によびかけるような口吻だ。こうした謙虚、かつ親しみをこめた行文は、おそらく両漢の求賢詔の流れをくんだものだろう。災異におびやかされているわけでもないのに、こうした謙抑した行文をつづれるところに、即位直後の梁武帝の自信や余裕が感じられる(この文は沈約の代作だが、武帝はそのできあがった原稿をきちんと点検しているはずである)。

さらに、伝統とのつながりを感じさせるのが、この勅における招隠の論理である。それは、「私はかねてより、山林に隠逸せんとする志は、上にたつ者の尊重すべきことだ」とおもっていた。しかし「教化の実をあげるためには、山林にひそむ高士でなければまかせられぬ」。ついては、貴殿の隠棲したい気もちをおさえ、まげて俗世におりてきていただきたい――という奇妙な論理である。つまり梁武帝の勅は、隠逸を価値あるものとみとめながら、それでも天子の立場としては、出仕してもらわねばならぬという、矛盾した発言をおこなっているのだ。これは「許由洗耳」の伝説に由来する論理を、そのまま踏襲しているのだろう。そしてそのうえで故事、つまり聖人の湯王や武王を批判した故事を引用しつつ、私や私がたてた王朝が完璧でないからといって、招隠を拒否せず、どうか出仕していただきたいと、丁重に要請しているのである。

謙虚な姿勢、奇妙な招隠論理、そして適切な故事の援用――伝統をふまえ、美文らしい文飾をこらした招隠書翰とは、こういう文章をいうのだろう。さすがは文壇の領袖、沈約の筆だけのことはある。さきにみた楊暕「与逸人王貞書」も、美文による模範的な招隠書翰ではあった。だがそれは、［楊暕は皇室の成員ではあっても］たかだか一地方官の発言であるにすぎなかった。その点、梁武帝のごとき名君の名で発せられると、偉大な天子にふさわしい、偉大な文章にみえてくるのがふしぎだ。じっさい、この勅には、殷の湯王や周の武王の故事、さらには伏羲や黄帝の話柄も登場してくるが、［梁武帝も明君なので］違和感はなく位負けもしていない。その意味でも、この沈約「為武帝与謝朏勅」は、天子の名で発せられた招隠書翰として、まことにふさわしい文章だといってよかろう。

くわえてこの「為武帝与謝朏勅」では、文章の巧緻さも指摘しておかねばならない。対偶を構成する句は全四十四句中の二十六句で全体の59％。また四字句は四十一句、六字句は二句で、これをあわせた四六句の割合は、

全体の98％にもおよぶ。また十一聯ある対偶のうち、七聯の64％において、両末字の平仄を「○↕●」のように対応させている。こうした文飾ぶりも、文豪の沈約らしい卓越した整斉ぶりだといってよかろう。

五、梁武帝期の招隠書翰

武帝の名で発せられた招隠書翰は、これだけではない。つづいて、謝朏とならぶ高士だった何胤、あざなは子季（四四六～五三一）をまねいた招隠書翰をみてみよう。

斉梁の交替がまぢかにせまった永元中（四九九～五〇一）、何胤は太常、そして太子詹事に任じられたが、ともに就任しなかった。やがて、蕭衍が実権をにぎって霸府をたてるや、何胤を軍謀祭酒として招聘しようとした。そこで蕭衍は、つぎのような招隠書翰「与何胤書」をおくったのだった。『梁書』巻五十一何胤伝から、その書翰を引用してみよう。[15]

②想恒清豫、縦情林壑、致足歓也。既「内絶心戦、以道養和、履候無爽。
　　外労物役、」
若邪擅美東区、山川相属、前世嘉賞、是為楽土。
③僕推遷簿官、自東徂西、悟言素対、用成睽闋。傾首東顧、曷日無懐。
疇昔歓遇、曳裾儒肆、実欲「臥遊千載、一行為吏、此事遂乖。
　　畋漁百氏、」
属以世道威夷、仍離屯故、投袂数千、剋黜釁禍。思得矚巻諮款、寓情古昔、夫豈不懐、事与願謝。

君清襟素託、栖寄不近、「中居人世、「既俯拾青組、但「理存用捨、
「殆同隠淪。「又脱履朱黻。「義貴隨時。
往識禍萌、実為先覚。超然独善、有識欽嗟。
今者為邦、貧賤咸恥、好仁由己、幸無凝滯。比別具白、此未尽言。今遣候承音息、矯首還翰、慰其引領。

②推察しますに、先生はいつも快適な日々で、山林澗谷で気ままにすごされ、さぞかしたのしいことでしょう。そして内ではご自身の心中の迷いをたち、外では俗輩の徒をねぎらっておられることと存じます。道術で身心を安定させておられるので、時候がかわっても体調をくずすことはありますまい。先生お住まいの若邪山は、東方でもっとも風光うるわしく、山川がつらなっています。前代からその美しさが称賛されており、まことに楽土というべきところです。

③私は、いろんな官署を転々とし、東奔西走してきました。妻と話をしようにも、いつも離ればなれでした。そのため妻の姿をあおぎつつ東望し、したわぬ日々がなかったほどです。

かつての日々、先生と私とは出会いをよろこび、ともに太学で研鑽をつみました。私は千年も読書をつづけ、百家の書をあさりたいと念じておりました。ところがいったん官位につくや、この願いは不可能になりました。というのも、たまたま世がみだれ、人びとが艱難にくるしむや、数千の勇士が発奮して、禍災をしずめんとする状況になったからです。私は読書にはげんで疑問を追求し、古典のなかに沈潜しようとおもっていましたし、[学問にはげむ]先生のことをおもわないではないのですが、事態はそうしたわが志とはちがってしまったのです。

先生は高潔な精神をいだき、人里はなれたところに身をよせています。中年のころ世にでてきたことも

ございましたが、その精神は隠棲したのとおなじでした。官爵をさずけられても、ボロ草履のようにすてさられました。それは先生が、進退の理を知悉し、時勢にしたがう道理を体得しておられたからです。また災禍の発生を予知できましたが、それはまことに先覚者というべきでしたし、超然として善をたもちましたが、それも識者が感嘆するところでした。

ですが、いま世間はよくおさまり、貧賤な者は出仕せぬことをはじています。仁をこのむかどうかは、自分しだいですので、どうか出仕をためらわぬようお願いいたします。過日に、別便で私の思いを叙しましたので、今回はこれ以上もうしません。使者を派遣して、先生のごようすをうかがわせます。ご返事を心待ちにしております。どうかわが思いにお応えくださいませ。

この「与何胤書」は、冒頭に「想うに［先生は］恒（つね）に清豫ならん」とあり、何胤の自適の日々を想像する字句からはじまっている。ただこの作は書翰なので、三段構成をとっていたはずだ。すると冒頭に、①時候のあいさつがあったとおもわれる。おそらく、それらの字句は実質的内容とは関係しないので、『梁書』引用にさいして略されたのだろう。それゆえ、冒頭の「②推察しますに」以下が、相手の何胤についての記述であり、つづく「③私は、いろんな官署を転々とし」云々が、自分（武帝）の近況や用件を叙した部分なのだろう。

この招隠書翰で注目したいのは、③における親近感の表しかたである。蕭衍は親近感をかもしだそうとして、まず「妻と話をしようにも、いつも離ればなれでした。そのため妻の姿をあおぎつつ東望し、したわぬ日々がなかったほどです」と、多忙のために妻とあえないことをグチっている。この部分、何胤の周辺にも同種のことがあって、それでかくつづったのかもしれないが、いずれにせよ、他の招隠書翰にないめずらしい内容だといえよう。さらに蕭衍はわかいころをふりかえって、「かつての日々、先生と私とは出会いをよろこび、学び舎で研鑽

をつみました。私は千年も読書をつづけ、百家の書をあさりたいと念じておりました」云々とのべ、自分も何胤とおなじく学者志望だったことをうちあけている。このあたりの思い出ばなしは、あたかも後漢の光武帝と厳光の関係を想起させるものといってよい。こうした発言によって、何胤との仲をちぢめようとしたのだろうが、率直かつ巧妙な叙しかただといえよう。

かく親近感をかもしだしてから、本題にはいって何胤に出仕を要請してゆく。何胤の人となりを「先生は高潔な精神をいだき」云々とたたえたうえで、招隠書翰の定石どおり、それでもまげてご出仕ねがいたいと要請している。ここで留意したいのは、「邦に道有るに、貧しく且つ賤しきは恥なり」という孔子のことば（『論語』泰伯）を、典故につかっていることだ。この典故は「国が平和なときには、士たるものは出仕すべきだ」という趣旨であり、それをふまえて、いまは平和な時代になったので、先生（何胤）もわが覇府に出仕してほしい、と説得している。つまり蕭衍は儒教ふう進退を援用しているのであり、道家の思想には依拠していないのである。

ただこの「与何胤書」の文章は、対偶がすくなくて、あまり美的な行文とはいえない。さらに対偶としたものの、「中居人世⇔殆同隠淪」（中ごろ人世に居る⇔殆んど隠淪するに同じ）や「既俯拾青組⇔又脱屣朱黻」（既に俯して青組を拾う⇔又た脱ぎて朱黻を屣のごとくす）は、あまりバランスがとれた対応とはいいがたい。その意味では、この作も側近のだれかの代作だろうが、右にみた沈約「為武帝与謝朏勅」にくらべると、修辞的にはおとった作だといわねばならない。

もう一篇、梁武帝関係の招隠書翰をみてみよう。この「又与何胤勅」という文章は、いままでの作とはちがって、蕭衍がみずから筆をとってつづったようだ。すなわち『梁書』何胤伝に、さきの「与何胤書」の引用にすぐつづけて、

高祖践阼、詔為特進、右光祿大夫。手勅曰、

高祖（武帝）は践阼するや（五〇二）、詔をくだして何胤を特進、右光祿大夫に任じようとした。そこでみずから勅の文をつづったのである。

とのべ、この勅をひいているからである。前回の「与何胤書」が不首尾におわった（何胤は出仕しなかった）ので、こんどは蕭衍自身が筆をとったわけだ。蕭衍はわかいころ、沈約らとともに「竟陵八友」（斉の蕭子良のもとにつどった八人の才子）と称されていたので、この種の文章にも自信があったのだろう。その自作の「又与何胤勅」は、つぎのようなものである。[16]

吾猥当期運、膺此楽推、而顧己蒙蔽、昧於治道。
雖復劬労日昃、思致隆平、而先王遺範、尚蘊方策、息挙之用、存乎其人。
兼以「世道澆暮、改俗遷風、良有未易。自非以「儒雅弘朝、則汨流所至、莫知其限。
「争詐繁起、「高尚軌物、
「治人之与治身、得失去取、為用孰多。
「独善之与兼済、
吾雖不学、頗好博古、「尚想高塵、今世務紛乱、憂責是当、不得不「屈道巌阿、
「毎懐撃節。「共成世美。
必望深達往懐、不吝濡足。今遣領軍司馬王果宣旨諭意。遅面在近。

私は、あやまって天運にめぐまれ、人びとの推戴をうけて即位した。だが、自身をふりかえれば愚昧だし、治道にもくらい人間にすぎぬ。日々努力して、泰平の世にしたいと念じているが、先王の典範たるや、経書

に方策が存するだけだし、政策実践の可否とて、しょせんは為政者そのひとの能力しだいだ。

くわえて、いまは世間がみだれて、悪徳非道がまかりとおっている。世の風俗を改善しようとしても、そうは簡単ではない。儒家の徒が朝臣たちを訓導し、高士たちが人びとを矯正してくれねば、激流がおしよせて、どこまでもながれてゆきかねない。この時期、経世の行いと自分の修養、あるいは自己の確立と済民の行い、それぞれどちらを優先すべきなのだろうか。

私は学問はじゅうぶんでないが、古典をまなぶのはきらいではないし、隠者の高潔さをしたい、称賛すべきだとかんがえている。いま世情が混乱するなか、私は経世の重責をになうことになった。ついては貴殿に、巌穴に隠棲せんとする信念をまげてもらい、私とともに治世に尽力してもらわざるをえなくなった。貴殿はむかしの交誼を想起し、濁世にふみこむのをいやがってはならぬぞ。いま領軍司馬の王果をつかわして、私の願いをつたえてもらうことにする。ちかぢかお会いできるのを、心待ちにしている。

この篇は勅のジャンルなので、時候のあいさつもなく、すこしかたぐるしい行文である。一篇の趣旨は、私はあやまって践祚してしまった。ついては「巌阿」にひそむ貴殿（何胤）の協力をえて、泰平の世をつくりたい。ぜひ出仕して協力していただきたい――というものだ。

このとき蕭衍は梁朝を樹立したばかりで、多忙だったはずだ。それでも彼はみずから筆をとって、何胤への招隠書翰をつづっている。なぜよりによってこんな多忙なときに、とおもうかもしれない。しかし、こうしたときこそ、招隠書翰をつづる絶好の時機なのである。蕭衍は聡明な男だ。この時期にこうした招隠を［しかも自筆の勅で］おこなってこそ、「自分は高士の招聘に熱心な明君であるぞ」とアピールできることをしっていたのだろう。[11]

ただこの「又与何胤勅」、行文としてはあまり巧緻なものではない。一篇中の対偶がすくなくて、美文とはいいにくいからである。たとえば、「先王遺範」四句などは対で表現できたはずだが、なぜか対偶にととのえていない。さらに、すくない対偶においても、「尚想高塵↔毎懐撃節」（尚お高塵を想う↔毎(つね)に撃節を懐(おも)う」は、「高塵」（隠者の高潔さ）と「撃節」（称賛すること）とをおなじ位置に配しており、あまりぴたりと対応していない。また「屈道巌阿↔共成世美」（道を巌阿に屈す↔成を世美に共にす）も、対偶とみなせばみなしえる程度の、くるしい字句配置というべきだろう。この蕭衍、むかしとった杵柄ということで、はりきって筆をとったのかもしれないが、やはり沈約のような練達の士にまかせたほうがよかった。

さて、梁代にかかれた、武帝以外の招隠書翰もみてみよう。それは、武帝の息子だった蕭統こと昭明太子の「与何胤書」である。蕭統は、他の書翰の文章も自分でかいているので、おそらくこの作も［右の武帝「又与何胤勅」とどうよう］自分でつづったのだろう。

◎某叩頭叩頭。昔
　園公道勝、漢盈屈節、況乃義兼乎此、而顧揆不肖哉。
　春卿経明、漢荘北面。

但経途千里、眇焉莫因。何嘗不
　夢姑胥而鬱陶、心往形留、於茲有年載矣。
　想具区而杼軸。

①方今
　朱明受謝、
　清風戒寒。

②想摂養得宜、与時休適。
　耽精義、息囂塵、激揚碩学、
　味玄理、玩泉石、誘接後進。

「志与秋天競高、楽可言乎。豈与「口厭芻豢、「耳聆絲竹者之娯者、同年而語哉。
「理与春泉争溢、

③方今「泰階端平、修日養夕、差得従容。「鑽閲六経、「研尋物理、「既以自慰、
「天下無事、「泛濫百氏、「領略清言、「且以自警。

而「才力有限、「熱疾慣其神、多慚過目、釈巻便忘。是以蒙求之懐、於茲弥軫。
「思力匪長。「風眩弊其体。

聊遣典書陳顕宗、申其蘊結。想敬□宜、此豈尽意。某叩頭。

◎統がもうしあげます。むかし東園公が道にすぐれておりましたので、漢恵帝は鄭重にお迎えしましたし、桓栄（あざなは春卿）が経書にあかるかったので、後漢明帝は師とあおぎました。まして両者をかねた何先生であれば、この不肖の私をご指導くださるにちがいないと存じております。ただ私たちのあいだは、千里もはなれておりますので、お会いできる機会がありませんでした。［何先生お住まいの］姑胥山を夢みては心が鬱々とならぬことはなく、また具区の沢を想起しては［お会いすべく］苦心しないことはなかったのです。でも心ははやっても、身体は移動できぬまま、今日まで何年もたってしまいました。

①いま朱夏がすぎ、秋風が寒さの到来をつげるころとなりました。

②おもうに、何先生はきちんと養生し、時候の変化にたがわぬ日々をお過ごしでしょう。そして精密な論理に熱中し、深奥な道理をあじわい、俗世と縁をきり、山水にあそんで、碩学をはげまし、後進をみちびかれていることでしょう。先生の志は秋空と高さをきそい、理は春泉と勢いをあらそっています。なんとたのしいことでしょう。そうした楽しみは、獣肉をいやというほどたべ、音楽をじっくりきくことなどと、同日

にかたれるものではありません。

③現在、梁朝は平安にして天下も安泰です。私は日夕に静養していますので、くつろいだ日々をすごせています。六経を熟読し、百家の書によみふけって、ものの道理をおいもとめ、清雅なことばをまなんでいます。ですから、気晴らしができ、また自戒もできます。ただ能力にかぎりがあり、思考力もすぐれません。また熱病が私の精神を混乱させ、めまいが体調をみだします。ですから、はずかしいことに書物をよんでも、巻をおくとすぐわすれてしまう始末です。そういうわけで、何先生に教えを請いたい思いが、ますますつよくなっております。典書の陳顕宗を派遣して、私の悶々たる思いをつたえさせます。何先生のご健勝お祈りします。手紙では意をつくせません。統敬白。

この書翰は、やはり何胤にむけて、お教えを請いたいと懇望したものである。執筆した年は、蕭統が死ぬ一年前、中大通二年（五三〇）だったろうと推定される（何胤は親子から、招隠書翰をおくられたことになる。こういうケースもめずらしい）。すると何胤は、このとき八十五歳ということになり、通常の意味での出仕は期待できない。蕭統は［父が招聘できなかった］何胤に一目でもお会いして、「不肖の私をご指導くださる」ことをのぞんでいたのだろう。

この「与何胤書」で注目したいのは、さきにみた隋の楊暕「与逸人王貞書」とよく似ていることだ。たとえば、教ジャンルでなく書ジャンルを採用していること（「某叩頭叩頭」ではじまり、「某叩頭」でおわる）、三段構成に準拠してつづっていること（◎故事列挙、①時候のあいさつ、②相手のようす、③自分の近況と用件）、招隠する姿勢が謙虚であること、そして隠棲を高雅なものとみとめながら、それでも「何先生に教えを請いたい」とうったえていること、さらに行文が対偶や四六を多用した美文であること――など。こうした叙しかたは、い

ずれも楊暕の書翰文によく似ている。すると楊暕は、この蕭統「与何胤書」をモデルにして、王貞への書翰をつづった可能性もあろう。南朝梁の皇太子だった蕭統の好文ぶりは、おそらく楊暕も耳にしていたはずだ。くわえて楊暕も皇太子ではないものの、前途悠々たる隋室の貴公子である。「あの梁の太子の真似をしてみよう」とおもいついて、この「与逸人王貞書」をつづった可能性はじゅうぶんあるとおもう。

もっとも、この蕭統「与何胤書」の文学的特徴については、さきに拙稿「蕭兄弟の書簡文について」（「中京大学文学部紀要」第五二―二号　二〇一八）でくわしく論じたので、ここではふれない。ただ、ひとつ付言しておきたいことがある。それは、この蕭統書翰は、招隠書翰としては例外的なほど、真剣な口調で何胤にお会いしたいとのべていることだ。その点では、［後述するように］儀礼的な傾向のつよい招隠書翰のなかでは、めずらしい作だといってよかろう。

六、清節と寛仁

以上、梁武帝期の作を中心に、六朝の招隠書翰をみわたしてきた。この招隠の行為とその文書、一読したかぎりでは、清節な隠者と謙虚な為政者とによる、うるわしいやりとりであり、また文書であるかのようにみえる。だが、もうすこし裏の事情をほりさげてゆくと、その実態はなまぐさいこともないではないようだ。この節では、おもに六朝隠逸論の古典というべき王瑤「論希企隠逸之風」（石川忠久・松岡栄志『中国の文人―竹林の七賢とその時代―』〈大修館書店　一九九一〉に日本語訳がある）の御論に依拠しながら、この時期の招隠やその書翰の舞台裏をのぞいてみよう。

本稿の「二、招隠の風」でもみたように、招隠なる行為は、為政者が自分の指南役となるべき人材をもとめる、求賢の一環だとかんがえられる。「求賢如渇」という四字熟語があるように、ふるい時代から為政者たちは、喉の渇きをいやそうとするがごとく、自分の羽翼となる賢人をもとめてきた。そうした賢人のなかでも、山林や巌穴にひそむ隠者は、［実際的な政治手腕ではなく］清節さによって世の汚濁をきよめてくれる特別な存在であり、麒麟や鳳凰に比すべき国の宝だと意識されていた。だからこそ、為政者は謙虚に、そして熱心に、隠者を招聘しようとしたのだった。

では隠者は、真に清節ある特別な存在だったのだろうか。また為政者は、本心から彼らを国の宝だと信じて、招聘していたのだろうか。残念ながら、答えはともに否。実態としては、［もちろん例外もあるが、おおむねは］隠者は明哲保身の道どころか、立身や名誉をほしがる打算的な連中がおおかった。なかには自分をたかくうりつけるため、隠者の風をまねる者さえいたのだった。いっぽう為政者のほうも、おおくはポーズで隠者を招聘しただけで、本心から世の汚濁をきよめてもらおうなどとは、おもっていなかったのである。

まず隠者のほうからみていこう。彼らの実態をしめす話柄として、隋代の杜淹（？～六二八）という人物に、つぎのような話がつたわっている（『旧唐書』杜淹伝）。

［杜淹］与同郡韋福嗣為莫逆之交。相与謀曰、「上好用嘉遁。蘇威以幽人見徴、擢居美職」。遂共入太白山。揚言隠逸、実欲邀求時誉。隋文帝聞而悪之、謫戍江表。

杜淹は、同郡の韋福嗣と莫逆の友だった。二人は相談した。「天子さまは隠者がおすきじゃ。蘇威なぞは隠者というだけで招聘されて、高官に抜擢されたぞ」。そこでふたりは、ともに太白山にはいった。そして隠逸したといいふらした。じっさいは、それで名声をたかめようとしたのである。隋の文帝はこの企み

を耳にしてにくみ、ふたりを江南の地に配流し、また兵役につかせたのだった。

この話はなかなかおもしろい。杜淹とその友人のふたりが、天子の隠者好きにつけこんで、隠者を偽装して立身しようともくろんだ。ところが、それが隋の文帝にばれてしまい、配流と兵役の憂きめにあったという。楊暕「与逸人王貞書」がかかれた、まさにその隋のころに、このような若者も存在していたのだ。また「終南捷径」（終南山に隠棲［して隠者のふりを］することは、立身の近道になる、の意）という成語は、杜淹より約百年のちの盧蔵用（六六四？～七一三）に関する逸話である。こうした逸話からも、当時、隠者尊重の気風の裏をかいて、立身の手づるにしようとする連中がいたことがしられよう。

この杜淹と盧蔵用はともに、のちに唐の宰相になっており、それほどおそまつな人物ではない。もちろん、おそまつな連中もおおかったにちがいないが、留意したいのは当時、隠逸という行為は［門閥や科挙合格とおなじように］立身のきっかけになりやすかった、ということだ。隠者および隠者であることには、こういう側面もあったのであり、とうぜんながら、彼らは清節さで世の汚濁をきよめることもないし、国の宝ともいいがたかった。ただ、才覚や狡知だけはふんだんに有する野心的な若者（もちろん中高年もいただろうが）が、そうした隠者イメージをうまく利用していたのである。

こうした、隠者イメージによって虚名を博することは、かなりふるくからあったようだ。隠者が重視されはじめた後漢の時期から、いくつかの例をあげると、

○［後漢書方術伝］英初被詔命、僉以為必不降志。及後応対、又無奇謨深策。談者以為失望。

樊英が天子の出仕命令をうけた当初、世人はみな、彼はきっと志をまげず仕官しないだろうとおもっていた。ところが［仕官して朝廷にでてき］、のちに天子の諮問に応対したのだが、なんの奇策や深謀もも

ていなかった。そのため論者たちは失望してしまった。

○［李固遺黄瓊書］自頃徴聘之士、胡元安、薛孟賞、朱仲昭、顧季鴻等、其功業皆無所採。是故俗論皆言処士純盗虚声。

［李固は黄瓊に書をおくっていった］このごろ朝廷に招聘された人物、胡元安、薛孟賞、朱仲昭、顧季鴻たちは、その［出仕後になした］功業たるや、いずれもりっぱなものは皆無という始末でした。おかげで世間の人びとは、「在野の隠者どもは、ただ虚名を博しているだけだ」と評判しています。

などである。ここでは、樊英や胡元安らが、虚名を博した連中だとされている。ただ右のうち、樊英というひとは、『易』の学者として名をのこした人物であり、みながみな、いいかげんなくわせ者だったわけではない。おそらく真に隠逸を希望していたものもいただろう。だが、こうした人びとは、隠者への過度の期待によって、実質以上に名声がたかまってしまった。そのため、結果的に出仕を余儀なくされてしまったとき、赤恥をかいてしまうことがすくなくなかったのである。

隠者を国の宝とする気風がつよい旧中国では、良心的な隠者であっても、こうした事態においこまれやすかった。いわんや、にせ隠者の不評ぶりはいうまでもあるまい。そうした事情は、後漢につづく六朝においても、似たようなものであった。たとえば『梁書』処士伝の末尾で、編者の姚察は六朝の隠者について、

世之誣処士者、多云純盗虚名、而無適用。蓋有負其実者。

世間の隠者をそしる人びとは、しばしば「隠者どもはただ虚名を博しているだけで、世間では通用しない連中だ」と評している。おもうに隠者には、看板にいつわりありのような連中がおおいのだろう。

とのべている。

世の隠者たちも、こうした事情はよく認識していた。だから為政者から招聘をうけたとき、彼らはそれに応ずべきかどうか、まよったことだろう。世をさけるといっても、あまりにかたくなに拒否して、為政者が招聘をあきらめては元も子もない。かといって、やすやす応じてしまっては、識者から「なんだ。隠逸のポーズで自分の価値をつりあげていたのか」と、軽蔑されかねない。できれば、「三顧の礼で懇望されたので、やむをえず」という形をとりたい――。このあたりが、招隠をうける隠者たちの、苦心の存するところだったのだろう。

もうひとつ、慎重な隠者たちの心中では、つぎのような悩みもあったことだろう。いまは処士であり、隠者であるが、しかし可能ならば出仕して立身をとげたい。でも、かつての樊英らのように、出仕後に自分の無能ぶりをさらだしても、ちょっと具合がわるい、と。

ところが六朝では、こうした悩みを解決する、都合のよい隠逸のしかたがくふうされた。それが「朝隠」とよばれるものだ。これは、招隠に応じて官位についていながら、その精神は超然として隠者の立場をまもっている、という隠逸のしかただ。その朝隠の理念を端的にかたった、

小隠は陵藪（りょうそう）に隠れ、
大隠は朝市（ちょうし）に隠る。

という詩句（へっぽこ隠者は山林にかくれ、真の隠者は都会にかくれる、の意。西晋の王康琚「反招隠詩」の一節）は、とくに有名になっている。この王康琚の詩句は、当時の隠者たちに福音のようにひびいたことだろう。なにしろ真の隠者（大隠）は山奥に隠棲せず、朝廷や市場（朝市）にいるというのだから、仕官したい隠者には好都合だ。これによって、六朝の隠者志向の人びとは、「隠逸か出仕か」でなやむようなこともなくなった。くわえて、かりに出仕しても、精神は隠者の立場をまもっているのだから、政務などみなくてもよい（道義的な教

化さえすればよい）ことになった。自分の無能ぶりをかくすのに、絶好の隠逸のしかたではあるまいか。

こうした時期、隠逸と立身という両立困難な問題を、たくみにきりぬけたひとの例として、宋斉梁の三代をいきぬいた謝朏の出処に注目してみよう。この謝朏は、さきにみた沈約「為武帝与謝朏勅」という招隠書翰をささげられた、その人物である。彼は生前、高士ふう処世をとりつつも、ときに出仕し、ときに隠棲するという、複雑な進退をくりかえした（注13を参照）。そのためだろう、同時代の硬骨の士だった范縝から、

司徒謝朏本有虚名、陛下擢之如此。前尚書令王亮頗有政体、陛下棄之如彼。是愚臣所不知。

司徒の謝朏はもともと［隠者として］虚名を博していたが、陛下（梁武帝）はこのように抜擢なされた。前尚書令の王亮は政治能力を有しながら、陛下はあのように降格された。私はこれはよくないことと存じます。

と、隠者の「虚名」によって抜擢されたやつだと批判されている（『梁書』王亮伝）。

こうした謝朏への見かたは、同時代のひとだけでない。後代の許槤も、『六朝文絜』所収の「為武帝与謝朏勅」への注釈において、

天監初、朏与何胤何点並徴不至。逃竄年余、一旦軽舟自詣闕下。時即以為司徒尚書令。乃復不省職事、衆頗失望。然則朏蓋守節不終者。既拝新命、且不称職。亦何足当此勅邪。

天監（五〇二～五一九）のはじめ、謝朏は何胤や何点らとともに出仕しなかった。一年あまり逃避していたが、ある日、軽舟にのって朝廷へやってきた。そのとき武帝はすぐ謝朏を司徒、尚書令に任じたのである。だが、彼は［以前からもそうだったが今回も］また政務をみようとしなかった。そこで民衆はみな、失望したのだった。こうした経歴である以上、謝朏は、節義をまっとうした者とはいえないだろう。謝朏

はあらたに任命されながら、その職責をはたさなかった。これでは謝朏は、この勅にふさわしい者とどうしていえようか。

とかたっている。つまり、謝朏はおそまつな処世や仕事ぶりに終始していた。とうてい名篇「為武帝与謝朏勅」をおくられるにふさわしい人物ではない、と酷評しているのである。[18]

じっさいはどうだったのか。謝朏の本伝（『梁書』巻一五）をみてみよう。すると、彼は年少にして神童とか奇とか称され、成人するや、つぎつぎと高位をさずけられた。だが彼はしばしば、「未だ拝さずして、固く外へ出るを求む」「表を抗げて召に応ぜず」「並びて屈せず」「並びて至らず」などと任官を拒否した。さらに出仕したとしても、「雑事を省ずして、悉く綱紀に付す」「郡に居ては毎に治めず。而して常に聚斂に務むれば、衆頗る之を譏るも、亦た屑しとせず」などとあり、ほとんど政治実務にはタッチしなかったようだ。謝朏が出仕した結果、なにか特段の治績をあげた（あるいは世の汚濁をきよめた）ということは、いっさいかかれていないのである。

だが、本伝を細心によんでみると、どうもそれは、彼なりの処世術だったようだ。当時の険悪な政治情勢をやりすごすため、彼はやむをえず、そうしたのらりくらりの態度をとっていたのである。こうした慎重な処世によって、彼は困難な時勢をうまくのりきることができた。いやそれどころか、斉の諸帝や梁武帝らから、「重名有りて、深く欽属する所となる」「王人は［謝朏を］送迎し、道に相望む」などと敬重されている。その結果、彼は隠者ふう人物としては、上乗の人生をおくることができたのだった。『梁書』編者の姚思廉は、そうした彼の世渡りについて、

謝朏之於宋代、蓋忠義者歟。当斉建武之世、拂衣止足。永元多難、確然独善。其疏蒋之流乎。洎高祖龍興、

旁求物色、角巾来仕、首陟台司、極出処之致矣。

謝朏は宋朝において、忠義な者だったといってよかろう。また斉の建武（四九四～四九八）の世においては、謝朏は隠棲して立身をもとめなかった。永元（四九九～五〇〇）のころは多難な時期だったが、彼はゆるぎなく自己をただしくたもった。そうした姿勢は、疏や蒋（？）の仲間だといえよう。梁武帝が即位するや、りっぱな人物をさがしもとめた。すると隠者たちが朝廷にやってきたが、謝朏はそのなかで最初に尚書令となった。これは出処進退の妙をきわめたものだといえよう。

とのべ、「出処進退の妙をきわめたもの」と好意的に評している。その意味ではこの謝朏こそ、朝隠ふうの進退をたくみに実践したひとだったといってよかろう。

さて、隠者のほうはこれぐらいにして、つぎに、招隠書翰をおくる為政者の実態もみてみよう。こちらのほうは、いままでみてきたように、［隠者への］丁重かつ謙虚な姿勢で一貫していたといってよい。

彼らは、右のごとき隠者の内実をしってはいた。だがそれでも、［隠者を尊敬するというより］自分の名声をたかめるために、隠者を謙虚な姿勢で招聘したのである。隠者の出処たるや、第二節でもみたように、招聘に応じる四皓のごときもいたり、応じない許由のごときもいる、というふうであった。為政者はそうした隠者に対し、応じてもよし、応じなくてもまたよし――という寛仁な態度をとりつづけたのだった。どうしてか。それは出仕の諾否にかかわらず、為政者にはかならず名声がころがりこんできたからである。

まず、招隠に応じてくれた場合はどうだったか。これはもちろん、隠者をまねきよせた明君として、ハクがつく。太公望をまねきよせた文王と、おなじ立場にたてるわけだ。それかあらぬか、明君たる彼は、応じてくれた隠者を［能力の有無にかかわらず］たかくとりたて、さまざまな優遇をあたえたのである。

いっぽう、応じてくれなかった場合は、面目まるつぶれになるのかというと、そんなことはない。あの堯帝でさえ、許由にことわられたのだ。名声に傷がつくどころか、むしろ堯帝とおなじ立場にたつことになって、この場合も［応じてくれたとき以上に］明君としての声誉はいやましてゆく。[19]

そのためだろう、隠者が招聘をことわったとしても、二人（為政者と隠者）のあいだにヒビがはいることはない。ことわられた為政者は、隠者の姿勢がかたくなだといって、非難したりはしない。彼は器量のおおきいところをみせて、おおらかに隠者の清節をうけいれ、招聘をあきらめるのである。隠者のほうも、そうした為政者にそれなりの礼をはらいつつ、しずしずと山林のなかへかえってゆく。そうした場面をすこし揶揄的に表現すれば、「臣にならぬかと招聘されると、臣になるのはいやでござると、民の立場を守るという単純な形になり、招聘した方は、やっぱりそうか、高士だのうと感心し、尊敬して引き下る」[20]ということになろう。

後漢から具体例をあげてみよう。後漢の光武帝のころ、周党という隠者がいた。この周党、帝の招隠を拒否しつづけるので、業をにやした博士の范升が、批判の上奏文をたてまつって、「この周党はろくな才もないくせに、隠逸で名声をたかめて三公のポストをねらっています。大不敬の罪とすべきです」と非難した。すると光武帝は、范升の上奏文を公卿にしめしながら、

自古明王聖主、必有不賓之士。伯夷叔斉不食周粟。太原周党不受朕祿、亦各有志焉。其賜帛四十匹。

古代より明王や聖主の世には、かならず出仕したがらぬ士がいたものだ。じっさい、伯夷と叔斉は周につかえなかった。太原の周党が朕の祿をうけようとしないのも、それなりの［隠逸の］志があってのことだろう。ついては、彼に帛四十匹をあたえよ。

という詔をくだしたという（『後漢書』逸民伝）。ここで光武帝は、「古代より明王や聖主の世には、かならず出

仕したがらぬ士がいたものだ」といって、伯夷と叔斉が周につかえなかった例をだす。そして周党が朕の祿をうけないのも、それなりの志があってのことだろうと、理解あるところをしめしている。光武帝はかく周党に出仕を強要せず、鷹揚に隠逸をゆるしてやったのだった（そうしたさいは、夷斉や許由の故事を利用することがおおい）。六朝になると、同種の、出仕を強要せず隠逸をゆるす、美談ふう話柄がおおく発生してくる。その意味でこの光武帝の話は、その先蹤［のひとつ］だといってよかろう。

このように為政者にとって、隠者を招聘することは、失敗ということのない、声誉アップの妙策だったのである。そのためだろう、現在からみれば、奇妙に感じられる話柄ものこっている。それは、東晋の軍閥だった桓玄に関する話だ。すなわち『晋書』桓玄伝に、

玄以歴代咸有肥遁之士、而己世独無。乃徴皇甫謐六世孫希之為著作、并給其資用。皆令譲而不受、号曰高士。時人名為「充隠」。

桓玄は、歴代ずっと隠者が発生していたのに、自分の世だけ隠者がいないぞ、とおもった。そこで彼は、［隠者として著名だった］皇甫謐の六世の孫の希之を招聘して著作郎となし、必要な物品をあたえた。そしてそれらをすべて拒絶させ、希之を「高士であるぞ」とたたえたのである。当時の人びとはこれを「充隠」（みせかけの隠者）と名づけたのだった。

という話がある。一時的に政権をにぎった桓玄だが、そのとき天下には隠者がいなかった。そこで彼は、皇甫謐（隠者として著名だった）の子孫を招聘し、贈り物をしたのだが、なぜかその子孫にそれを辞退させた。そして「高士であるぞ」とたたえた、という。

桓玄はなぜ、そんなややこしいことをして、「充隠」（みせかけの隠者）をつくりだしたのか。それは、彼の治

世中に［堯帝や光武帝のときとどうよう］高邁な隠者がきちんと生存しており、しかもその隠者が彼の招隠を拒否した、という実績がほしかったからだろう。桓玄はこうすることによって、自分を堯帝や光武帝のような存在（隠者を招聘する明君、そして招隠をことわられても、鷹揚にゆるしてやる寛仁な君主）にみせかけたかったのだろう。これでわかるように、自分の治世中に隠者がいること、そしてその隠者に出仕をこばまれることは、けっして不名誉なことではなく、むしろ明君のあかしだったのである。

七、江淹の「為宋建平王聘逸士教」

さて、ここまで王瑤「論希企隠逸之風」の御論に依拠しつつ、当時の招隠の実態や招隠書翰の舞台裏をみわたしてきた。このように六朝のころは、為政者は隠者を慰労し、招聘するポーズさえとれば、じっさいに応じてもらえようがもらえまいが、自分が明君であることを印象づけることができたのだった。だから天子や地方官たちは、さかんに隠者を招聘し、また招隠書翰をかきおくったのである。当時はおそらく、［末端の地方官もふくめれば］おおくの招隠書翰がかかれたはずであり、現存しているのはそのごく一部なのだろう。

ところで、いままで検討してきた招隠書翰は、為政者（天子や地方官）が直接、隠者によびかけた文書に限定してきた。だが、「招隠書翰」の定義をすこしゆるめ、「隠者の招聘に関した文書」というふうにゆるやかに規定すれば、その量はずっとおおくなる。

たとえば、為政者が隠者そのひとでなく、自分の臣僚たちにむかって「隠者をさがして推薦せよ」と命じた文書（詔勅や教令がおおい）、あるいは臣僚Aが自分のしる隠者Bを、自分の主君（為政者）に推薦する文書（表

奏の類がおおい）――などがそれである。さらには、個人Aが自分の知る隠者Bにむかって、「為政者Cにつかえたらどうか」と勧誘したり忠告したりした文書（書翰の類がおおい）や、臣僚Aが自分のしる隠者Bにむかって、「自分の主君（為政者）につかえたらどうか」と勧誘したり忠告したりした文書（書翰の類がおおい）も、広義の招隠に関連した文書とみなしてよいかもしれない。こうかんがえると招隠関連の文書は、そうとうの広がりをもっているといえよう。隠者という存在、ひいては出仕するかしないかという問題が、いかに当時の知識人や文学とふかくかかわっていたかに、あらためて気づくのである。

この節では、そうした広義の招隠文書を一篇だけ紹介してみよう。それは、南朝の宋末のころ、江淹（四四四～五〇五）がつづった「為宋建平王聘逸士教」という、教の文章である。この作は、地方官（建平王）が自分の臣僚にむかって、「隠者をさがして推薦せよ」と命じた文書である。それを江淹が代作したわけだ。

標題中の「建平王」とは、宋の皇族である劉景素（四五二～四七六）をさす。彼は泰始七年（四七一）、弱冠にして荊州刺史となり、当地に赴任してきた。やはり二十八歳とわかかった江淹も、劉景素に随従して荊州（もと楚の国）にやってき、命によってこの教の文章を代作したのだった。[21]

府州国紀綱。夫「嬀夏已沒、雖「周恵之富、猶有魚潭之士。
大道不行。「漢教之隆、亦見棲山之夫。
「迹絶雲気、皆待「絳螭驤首、是以「遺風独扇百代、斯乃「王教之助、
意負青天、「翠虯来儀。「余烈激厲後生。「古人之意焉。
吾「税駕旧楚、「挹於陵之操、而山川遐久、流風無亡沫。
「憩乗汀潭。「想漢陰之高。

養志数人、並未徴采。善操将棄、良用慨然。宜「速詳旧礼、庶暢此幽襟、以旌蓬蓽。
各遣纁招。」

紀綱の官が［右将軍建平王にかわって］いう。

舜帝や禹王がお亡くなりになるや、賢人登用の道がとざされてしまった。周朝は恩恵あまねかったが、［呂尚のような］江浜で釣り糸をたれる士がいたし、漢朝も教化がさかんだったが、［四皓のごとき］山林に隠棲する者もいた。こうした隠者たちは、雲のうえにでて、青天を背にし、赤龍（賢君）が鎌首をもちあげ、青龍（明主）がお越しになるのを心待ちにしていたのだ。こうして、隠者たちの遺風が百代もつたわってきたし、その余光が後世の人びとをはげましてくれたのだった。これこそ、君王の経世をたすけるものであり、また昔人の心意気でもあったのである。

私（建平王）は楚の故地に馬車をとどめ、この荊州の地に赴任してきた。［当地の］於陵（おりょう）で困窮した陳仲子の節操をしたい、漢陰の老人の高節に敬服している。荊州の山川は歴史はふるいが、かかる隠者の気風はやむことがなかった。この地の志をもった人びとは、まだお招きしておらぬはずじゃ。節操ありながら登用されておらぬとおもえば、まことに慨嘆せずにはおられぬ。すみやかに古礼を調査し、各官署は礼物をもって招聘せよ。そして私の真情をくみとって、陋居の隠者たちを顕彰してほしい。

この「為宋建平王聘逸士教」は、あたらしい荊州刺史（劉景素）が直接、隠者によびかけたものではない。刺史［の意をうけた紀綱の官（江淹）］が、各官署の属僚たちにむかって、「隠者をさがして官府に推薦せよ」と命じたものだ。その意味でこの作は、間接的な招隠書翰だといえようか。江淹はこのなかで、著名な［荊州の］隠者の故事を点綴しながら、隠者たるものは「君王の経世をたすけるものであり、また昔人の心意気でもあった」

と、その存在意義を格調たかく叙している。そして属僚たちに、「すみやかに古礼を調査し、各官署は礼物をもって招聘せよ」と命じるのである。

清の許槤は『六朝文絜』にこの作を採録し、

処処矜煉窅邈、絶非肥艶濃香。故妙。

あちこち格調たかく洗練され、また深遠な表現がなされているが、けっして艶麗すぎるということはない。だから絶妙なのである。

と評している。この批評のうち「あちこち格調たかく洗練され、また深遠な表現がなされている」という部分は、おそらく

○ 周恵之富、猶有魚潭之士。
　漢教之隆、亦見棲山之夫。
○ 挹於陵之操、
　想漢陰之高。

などをさすのではあるまいか。これらの字句は対偶構造のなかに、著名な隠者の典故（注21を参照）をおりこんだものだ。また、

皆待 絳螭驤首、是以 遺風独扇百代、
　翠虬来儀。　余烈激厲後生。

あたりでは、対偶中の色彩（絳↔翠）と時間（百代↔後生）の対比が巧妙である。これらの対偶は、たしかに表現が「矜煉」（格調たかく洗練されている、の意）されていて、内容は「窅邈」（深遠である、の意）であると評

されてよいであろう。くわえて江淹は、そうした修辞性ゆたかな語句を布置しながらも、後半では散句をつづけている。そうした駢散を兼行させたところが、許槤には「けっして艶麗すぎるということはない」と感じられたのだろう。

このとき江淹がつかえた劉景素なる人物は、若年時からそうとうの野心家であった。この教を布告したときの彼は、まだ十九歳か二十歳だったはずだ。かく青年といってよいほどの年齢でありながら、招隠を想到したことじたい、彼の有能さ（もしくは狡知さ）を証するものだといってよい。彼はこうした教を発することによって、「新刺史たる自分は、隠者の招聘に熱心であるぞ」という姿勢をあきらかにして、自分の明君ぶりをしらしめようとしたのだろう（もっとも、劉景素は後日、その有能さが仇となって警戒され、けっきょく殺害されてしまった）。

このようにみてくると、この「為宋建平王聘逸士教」より約百三十年後、隋の世に楊暕が「与逸人王貞書」をづづったときも、同種の意図があったとかんがえてよかろう。右でのべてきた隠者尊重の気風や招隠書翰の效能を知悉していればこそ、楊暕は王貞へ書翰をおくったにちがいない。そしてそれによって、隠者を招聘している自分の熱心な姿勢をみせつけ、父（煬帝）の歓心をかおうとしたのだろう。

この楊暕という貴公子、「与逸人王貞書」をつづった以後の半生をみれば、けっしてすぐれた人物とはいえない。本稿の冒頭にのべたように、彼はこの書翰をかいた直後、兄が急逝するや、つぎは自分が太子だとおもいこんで驕奢な生活をおくり、父煬帝の不信をまねいてしまった。要するにその程度の人物だったのだ。せっかくりっぱな招隠書翰をつづって、自分の声誉を［いっときは］たかめたのだが、けっきょく光武帝や梁武帝のごとき存在にはなれず、劉景素と似たような末路をたどってしまったのである。

いっぽう、書翰をおくられた王貞のほうも、意志堅固な隠者だったとはみとめがたい。この楊暕書翰をうけとったあとの王貞の生涯をたどれば、

及貞至、王以客礼待之、朝夕遣問安不。又索文集、貞啓謝曰、……。斉王覧所上集、善之、賜良馬四匹。貞復上江都賦、王賜錢十萬貫、馬二匹。未幾、以疾甚還郷里、終于家。

王貞が［楊暕の招きに応じて］やってくるや、斉王の楊暕は客礼でこれを遇し、朝夕に使いを派遣して安否をたずねた。楊暕が王貞の文集をもとめるや、王貞は感謝していった。……楊暕は王貞が献上した文集をよむと、これを称賛し、良馬四匹をたまわった。王貞がまた「江都賦」を献上すると、楊暕は錢十萬貫と馬二匹をたまわった。まもなく王貞は病気がおもくなり、郷里にかえって家でなくなった。

というものだ。これでみると王貞は、さっさと楊暕の招隠に応じてしまっている。どうやら、隠逸の意志はあまりつよくなかったようだ。そして楊暕の幕下にはいり、いわば宮廷文人のような立場についたらしい。彼が楊暕に献じたという「江都賦」は現存せぬが、おそらく標題からして楊暕が鎮した江都の繁栄ぶりを、盛大にたたえた作だったのだろう。それからいくばくもしないうちに、彼は「病気がおもくなり、郷里にかえって家でなくなった」のである。

このように楊暕の幕下にはいったあとの王貞には、特段に［道義的な教化をおこなったというような］隠者らしい行跡はみとめられない。『隋書』の文学伝にとられるだけあって、隠者というより文人の要素がつよい人がらだったのだろう。その意味では王貞が、招隠書翰をおくられるにたる真正の隠者だったかは、かなり疑問だとせねばなさない。ひょっとすると、彼も杜淹や盧蔵用とどうよう「終南捷径」をねらって、隠者のポーズをとっていただけかもしれない。

だが、招聘するほうの楊暕にとっては、王貞が真に隠者志向を有していたかなどは、どうでもよかったのだ。楊暕からすれば、招隠書翰をつづって声誉をたかめることが目的であって、おくる相手は隠者らしい男であればだれでもよかった。そのときたまたま目についたのが、王貞だったのだろう。けっきょく「与逸人王貞書」においては、招聘するほうもされるほうも、けっこう疑問のおおい人物だったのである。

八、平和な世の産物

この招隠書翰は、さきにものべたように、新王朝が樹立されるなど政治的に安定した、あるいは安定しはじめた時期に、おおくかかれてきた。そうした時期は、ときの天子や為政者が、隠者をさがしもとめるほど、道義的な教化に熱心であり、また［隠者が出仕を拒否したときは］山林への帰還をゆるすほど、寛容でゆとりがあったからだろう。その意味で招隠書翰は、いわば平和な世の産物だとみなすことができる。

これを逆にいえば、隠者が尊重されず招隠書翰がかかれぬ時期は、政権が安定せぬギスギスした世相だったといってよい。権力闘争や騒乱が多発する政情不安な時期には、道義的な教化しか期待できぬ隠者など、とうてい招聘する余裕がないからだ。たとえば梁武帝と同時期の北方の両国、北斉と北周がそうした状況だった。この両国、たがいにくうかくわれるかの死闘を演じていたのだが、いっぽうそれぞれの国内でも、クーデターや粛清がたえなかった。おかげで世相もすさんでおり、招隠書翰をつづるどころか、そもそも隠逸を許容することじたいが困難だった。その混迷する北地でいきた顔之推は、自分の子孫たちにつぎのようにのべている。

［顔氏家訓終制］播越他郷、無復資廕。使汝等沈淪廝役、以為先世之恥。故靦冒人間、不敢墜失。兼以北方

政教厳切、全無隠退者故也。

［梁がほろんだあと］わが顔一家は北方の異郷を転々とし、蔭官（父祖の功労のおかげで仕官すること）のあてもなかった。おまえたち（顔之推の息子）を下層にしずませては、ご先祖さまにもはずかしい思いをさせることになる。だから、私は臆面もなく世間にでしゃばって、没落せぬよう努力してきた。くわえて北朝ではご政道がきびしくて、隠逸なんぞはとうていゆるされなかったのじゃ。

顔之推は梁武帝期に成長したが、侯景の乱による混乱で北方に拉致され、そのまま北周、北斉、そして隋と三朝を転々としてきた。その彼が「北朝ではご政道がきびしくて、隠逸なんぞはとうていゆるされなかった」といっているのだ。この裏にはおそらく、「私がわかいころをすごした南朝では、隠逸がゆるされていたのに」という含みがあるのだろう。

じっさい、『南史』隠逸伝には四十六人の伝記がならぶのに、『北史』隠逸伝ではわずか七名にすぎない。やはり北朝では、隠者は生存が困難だったのである。かく隠者がすくない理由については、法制の運用がきびしかった、天子そのひとが粗暴だった、中央集権への志向がつよかった、仕官して王朝に奉じることを要求していた、私的な「孝」よりも公的な「忠」を重視した――などの点が指摘されている。[21] これを要するに、当時の北方の地では、隠者を許容するほどの政治的余裕がなかったのである。

ただ、この北朝の場合は、まだ隠者が発生しにくい、という程度にすぎない。少数とはいえ、隠者が発生し、なんとか生存できていたのだから。ところが、もっとふるい時代では、隠者が為政者の統治に邪魔になるとして、積極的にころされたこともあったようだ。たとえば周王朝の初期のころ、狂**矯**（きょういつ）（狂**矯**・華士〈兄弟とされる〉と連名で記述されることもある）という隠者がいた。その隠者、隠者であることをつらぬいたため、ときの大政

治家、太公望に殺害されてしまったのだった。先秦の『韓非子』外儲説右上に、つぎのような話がつたわっている。

太公望東封於斉、海上有賢者狂矯。太公望聞之往請焉。三卻馬於門、而狂矯不報見也。太公望誅之。当是時也、周公旦在魯、馳往止之。比至、已誅之矣。周公旦曰、「狂矯天下賢者也。夫子何為誅之」。太公望曰、「狂矯也、義不臣天子、不友諸侯。吾恐其乱法易教也。故以為首誅。今有馬於此、形容似驥也。然駆之不往、引之不前、雖臧獲、不託足以旋其軫也」。

太公望が東のかた斉に封ぜられたとき、海のそばに狂矯という賢人がすんでいた。太公望は狂矯のうわさを耳にするや、でかけてゆき招聘しようとした。すると、狂矯は三度も太公望の馬を外にとめて自宅にいれず、また答礼にもいかなかった。そこで太公望は狂矯をころした。そのとき周公旦は魯にいたが、いそぎ馬をはしらせて、殺害をとめようとした。だが到着したときには、もう狂矯をころしていた。

周公旦はいった。「あの狂矯は天下の賢人である。なぜあなたは彼を殺害したのか」。すると、太公望はいった。「狂矯という男は、主義として天子につかえず、諸侯とも交際しません。私は、こんな男は国法をみだし、教令をかろんじるだろうとおもい、最初に誅したのです。いまここに馬がいて、いかにも駿馬のようにみえます。ですが、その馬がおしてもひいても、はしろうとしなければ、どんな下僕でも、その馬に馬車をひかせたりはしないでしょう」。

ここにでてくる狂矯、原文では「賢者」だとされるが、天子につかえず、諸侯と交際しないとあるので、むしろ隠者と解するべきだろう。その隠者の狂矯は、太公望に敵視されて、誅殺されてしまったのだ。つたえるところによれば、この太公望もかつては、江浜で釣り糸をたれていた隠者だった。だが、周の武王につかえて殷をた

おすや、彼は冷酷な為政者に変身してしまったようだ。ここの太公望の発言を、私なりにパラフレーズすれば、主義として天子につかえず、諸侯とも交際せぬという隠者どもは、いくら賢人であっても、無用の存在にすぎぬ。こんな連中は国法をみだし、教令をかろんじるにきまっている。だから、斉国をおさめる手はじめに一罰百戒、誅殺してしまった――ということだろう。

こうした隠者を敵視するような話柄が、法家思想の書である『韓非子』に収録されているのは、象徴的だといってよい。つまりこの話はおそらく、

隠者　↓　主君のいうことをきかぬ　↓　統治の邪魔になる　↓　排除すべきだ

という発想なのだろう。為政者となった太公望からみれば、狂**矯**のごとき隠者は統治の邪魔になる存在であり、排除し粛清せねばならぬ存在なのである。こうした太公望の考えかたは、いかにも法家思想ふうの武断的なものだ。儒家ふう発想では、隠者は道義的な教化をなす者であり、おのが朝廷や官府にまねき優遇すべきだとかんがえるのだが、それとはまったく正反対の考えかただといってよかろう。

この狂**矯**の話柄じたいは、思想的な寓話であって、たぶん実話ではあるまい。だがそれでも多少は、当時のなんらかの風潮を反映しているのだろう。じっさい、為政者が自分の言いなりにならぬ連中を［統治の邪魔になるとして］粛清する話は、書物のなかどころか、歴史上には、はいてすてるほどあるからだ。右の狂**矯**のケースに似たものを、六朝期のなかからあげれば、竹林七賢のひとりにかぞえられる嵇康の場合がそうだろう。

魏の嵇康は、自分の妻が魏王室の出身だったこともあって、司馬氏につかえようとせず、隠者ふう生活をおくっていた。だが、魏晋交替をねらう司馬昭の腹心だった鍾会ににらまれ、最後は呂安の事件に連座して刑死させられたのだった。彼は名目上は、不孝者の呂安を弁護する姿勢を罪ありとされたのだが、実質的には狂**矯**とおなじ

く、ときの政権になびこうとしなかったので、邪魔になってころされたのである。嵇康殺害の急先鋒だった鍾会は、嵇康をさばく法廷において、

今皇道開明、四海風靡、辺鄙無詭隨之民、街巷無異口之議。而康上不臣天子、下不事王侯、軽時傲世、不為物用、無益於今、有敗於俗。昔太公誅華士、孔子戮少正卯、以其負才乱羣惑衆也。今不誅康、無以清潔王道。いま、皇道はおおいにひらけ、天下はおだやかとなりました。辺地でも偽りをなす民はなく、都邑にも反抗する者はおりません。ところがこの嵇康だけは、かみは天子にお仕えせず、しもは王侯にしたがっておりません。時世を軽蔑するだけで、なんの役にもたたないし、また当代に無益な存在であるうえに、良俗もみだしています。むかし太公望が華士［と狂矯］を誅殺し、孔子が少正卯を殺害したのも、彼らが自分の才をたのんで群衆をまどわせたからでした。ですから、いまこの嵇康を誅さねば、王道をきよめることはできないのです。

と弁じたという（『世説新語』雅量篇注引文士伝）。この鍾会の議論のなかに、太公望が華士［と狂矯］を誅殺した話が例示されているのは、偶然ながらおもしろい（この華士と狂矯は、六朝の隠逸論のなかに、許由や伯夷叔斉らとならんでしばしば登場する）。鍾会のころは、［右の］太公望が隠者を殺害した話柄が、反司馬氏の者を粛清する口実に利用されているのである。

以上のような北朝の隠者事情や『韓非子』の話柄、嵇康の事例などをみてきたとき、楊暕や沈約らの招隠書翰が、平和な世の産物であったことが、実感をもって了解されてこよう。高位にいる為政者が、山林にひそむ隠者にむかって、「山林の隠所からでてきて、私の政（まつりごと）に協力してくだされ」と懇請する招隠書翰。こうした文書は、隠者に寛容な儒教精神と、安定した政治情勢とが幸福な一致をみたとき、はじめて想起され、つづられるものだっ

たのである。その意味で、招隠書翰は平和で寛容な時代にかかれた、しあわせな文書だといってよいのかもしれない。

九、読後感よき文学

そうした目で、あらためて一連の招隠書翰をよみなおしてみれば、どの篇も読後感がよいことに気づく。きよらかな隠者と寛仁な為政者がおりなす招隠の文書は、たとえ実態は、第六節でのべたごとく偽善的なものだったとしても、謙抑と尊敬の情があふれていて気もちがよいものだ。

この招隠書翰に類似した文書として、九錫文とよばれるものがある。これは天子が、「何某に九錫（九種の栄典）をたまう」と布告する詔勅文の一種である。その内容は、「愚昧な朕は、貴殿のこれまでの尽力に感謝している。ついては貴殿に、九錫を賜与することにしたぞ」というもので、君臣相和（あいわ）したうるわしい文書にみえる。くわえてその文章たるや、対偶や典故で装飾された、華麗な美文でつづられるのが通例であった。その意味で、この九錫文も謙抑と尊敬にいろどられた、すばらしい詔勅文だといってよかろう。

ところが実際のところは、この九錫文の発布は、ちかい将来その人物に帝位を禅譲することを、天下におおやけにするにひとしいものだった。すでに実力者aが権力を確立し、あとはB王朝をほろぼしてA王朝を樹立するだけとなったとき、B王朝の天子bにせまって自分にむけて九錫文を発布させる。するとaは、「おろかな自分は九錫をうける資格はありませぬ」といって辞退するが、三度目に、百官に懇請されたのでしかたなく、という形で九錫を拝受する――。こうして九錫の授受が完成し、天下を禅譲する体裁がととのうわけである。そのb

からaへの禅譲（実質は帝位の強奪）の予告となるのが、この九錫文なのだった。[23]

この二種の文書は、一見は似かよっているが、執筆後の経過やその読後感には、そうとうちがったものがある。九錫文のほうは、これを発布した天子bは、後日たいてい譲位し（実質はさせられ）、そして最後には実力者aによって殺害されるのだ。九錫を賜与するbは、やがてころされる自分の運命をしりつつ、この猿芝居を強要されているのである。つまり九錫文は王朝交替のみならず、その後の惨劇も予告した美文なのであり、その意味で、ひどく読後感がわるいものなのである。

それに対し、この招隠書翰のほうは、だれも殺害されることはない。平穏で安定した王朝のもと、山林の隠者と官府の為政者とのあいだで、「臣にならぬか」「臣になるのはいやでござる」「やっぱりそうか、高士だのう」――というのんびりした応酬がおこなわれるだけ。だれも血をながすことなく、いたって平和なものだ。この招隠書翰に対し、それじたいが偽善であるとか、いんちきであるとかの批判は、たしかにありえるだろうし、まちがいだともいえない。だがそうだとしても、この文章をよんで気分がわるくなるということは、あまりないだろうとおもわれる。

読後感のよさという観点からみれば、この招隠書翰にちかいのは、両漢によく発布された罪己詔ではあるまいか。罪己詔とは「己（おのれ）を罪（つみ）する詔」と訓じる。つまり、天子が自分で自分の失政を反省した詔のことであり、いわば天子自身の始末書のごときものだ。こうした両漢の罪己詔については、清の歴史家にして学者だった趙翼が注目し、彼の『廿二史箚記』の巻二「漢詔多懼詞」にその具体例を十二篇ほどあげてくれている。そのなかから一篇、後漢の安帝「選挙詔」（『後漢書』安帝紀の永初五年〈一一一〉の条）をしめしてみよう。

朕以不徳、奉郊廟承大業、不能興和降善、為人祈福。灾異蜂起、寇賊縦横、夷狄猾夏、戎事不息、百姓匱乏、

疲於徴発。重以蝗蟲滋生、害及成麦、秋稼方收、甚可悼也。朕以不明、統理失中、亦未獲忠良以毗闕政。……朕は不徳でありながら、郊廟を奉じ大業をうけついでいる。だが、和平をもたらし善行をひろめることができず、民のために幸を祈念することもできておらぬ。ために災異が出現し、寇賊が跳梁し、夷狄が侵犯し、紛争がやまない。民衆は窮乏し、徴発で疲弊しているが、さらに蝗害が発生し、害は麦におよんだ。秋の収穫直前だったので、悲嘆の悲痛の極みだ。これは朕の不明によって、政治に適切さを欠いたからである。また忠良の臣もえられないので、失政をただすこともできぬ始末となっている。……

これをよむと、安帝は、災異の出現や寇賊の跳梁、さらに蝗害の発生を、自分の失政［への天の咎め］のためだと信じていたようだ。かかる苦境にたちいたったのは、「朕の不明によって、政治に適切さを欠いたから」だと、反省の弁をのべている。この詔、ながいので後半は略したが、その略した部分では、ついては忠良の臣を推薦してほしい。朕はそれらの者の補佐をえて、この危機をのりきりたいのだとのべて、一篇をとじているのである。[24]

趙翼は、こうした罪己詔を提示したあと、これらを発した両漢の天子たち（前漢の文帝から後漢の順帝まで）について、

諸詔雖皆出自継体守文之君、不能有高武英気、然皆小心謹畏、故多蒙業而安。両漢之衰、但有庸主、而無暴君、亦家風使然也。

これらの両漢の諸詔は、いずれも帝位を継承し、前代の成法を遵守した［文弱なタイプの］君主から発布されたものである。彼らは［前漢の］高祖や武帝のような英主ぶりは、もちあわせておらぬ。だが、どの君主も慎重かつ謹直にふるまったので、ぶじに帝業をまもり、やすんじることができたのだった。両漢が

衰微してきたのは、こうした凡庸な君主がつづいたからだが、それでも暴君が出現しなかったのは、漢室の家風がしからしめたものだろう。

と批評している。この批評は要するに、罪己詔は、あの高祖や武帝のごとき英主とはちがう、小粒で文弱な天子たちが発布したものだ。彼らは帝位をつぐや、ただ小心翼々としていただけで、凡庸な君主たちにすぎなかったのだ――というのだろう。あまり好意的でない、過小ぎみの評価をくだしている。そういわれれば、この安帝「選挙詔」からうかがえる天子像は、凡庸な君主が災異におびやかされ、ただおろおろしているだけ、という印象がなくもない。よくいえば誠実で謹直な人がらといえようが、しかしいささか肝っ玉がちいさい感はいなめないだろう。

だが、こうした見かたは、すこし冷淡すぎはしないだろうか。たしかに安帝らは、英主ではなかったかもしれない。しかし見かたをかえれば、彼らの罪己詔には、天の咎めをおそれ、自己の失政をみとめる謙虚さが、率直に表(ひょう)されている。そうした姿勢は、本稿でみてきた招隠書翰とも共通するもので、よむ者にこのましい読後感をあたえるものだ。高祖や武帝のような英邁さはもたなかったとしても、彼らなりの誠実さは、くむべきものがあるのではないだろうか。

こうした発想で両漢の罪己詔をみなおした研究が、最近になって公表された。それが、中国の郗文倩氏の手になる、「漢代的罪己詔―文体与文化」（「福建師範大学学報」二〇一二―五）という御論である。この郗氏の議論によると、この種の罪己詔は、天子自身が悔悟の情をあきらかにすることによって、天下に賢人や諫言をもとめる（求賢）ことにつながった。その結果、旧時の社会に諫争、つまりあらそってでも貴顕や主君をいさめる伝統を、おしひろげることになったという。

さらに郗論文は、これらの罪己詔は世情を安定させるのに、よい効能を発揮したとも指摘される。そうした事例として、郗氏はすこし時代はおくれるが、唐徳宗（在位七七九～八〇五）の「奉天改元大赦制」に関する事例をあげて、具体的に説明してくれている。すなわち唐の徳宗が即位してまもなく、節度使が反乱をおこした。そして一時的ではあるが、反乱軍が都の長安を占拠し（七八三）、徳宗は長安脱出を余儀なくされるという状況におちいってしまう。そこで翌年の春、徳宗は「奉天改元大赦制」という自己を罪する詔を発して、大要つぎのようにのべた。すなわち、

朕は深宮で成長したので、国事にくらい。ながいこと安易な慣習にひたったので、逸楽にいて危険をわすれてしまった。農耕のつらさをしらず、征役の苦労もわからぬので、恩恵は下じもにゆきわたらず、民情もしるすべがなかった。そういうわけで戦争をおこしてしまい、民衆を疲弊させることになってしまった。上は祖宗をなやまし、下は民草にそむいてしまったのだ。いま赤面し、心をいためている。罪過は朕のうえにあり、ふかく恥じかつ後悔するしだいである……。

とかたり、反省の弁をのべたのである。徳宗はこうした詔を発したうえで、大赦をおこなって天下の人びとに謝したのだった。

この徳宗の罪己詔で注目したいのは、この詔をくだしたあとの人びとの反応である。『資治通鑑』巻二百二十九は、この文書を引用したあと、その後の経過について、

赦下、四方人心大悦。及上還長安明年、李抱真入朝為上言、「山東宣布赦書、士卒皆感泣。臣見人情如此、知賊不足平也」。

大赦令がくだるや、四方の人心はおおいによろこんだ。徳宗が長安にかえった翌年（七八五）、節度使の

李抱真が入朝するや、徳宗にもうしあげた。「山東の地ではこの赦令が宣布されるや、士卒はみな感泣しました。臣はかく士卒がよろこんでいるのをみて、賊などすぐついえるだろうと確信しました」。

とのべている。これによると、徳宗が自己の不才をさらけだし、率直かつ真摯に反省する姿は、当時の人びとの心をうったようだ。「四方の人心はおおいによろこんだ」「士卒はみな感泣しました」とあるが、それは大赦をうけたからだけでなく、この罪己詔の文章の効果もあったであろう。

おもうに、本稿が論じてきたこの招隠書翰も、この徳宗の詔と同種の効能があったのではないか。六朝の為政者たちは、隠逸をよき行為だとみとめながら、それでも隠者にまげて出仕し、私の愚昧さをただしてほしい、と懇望していた。そうした招隠書翰の姿勢は、自分の愚昧さや不徳ぶりを自認し、諫言や協力をもとめようとする点で、両漢や唐徳宗の罪己詔とよく似ている。両者に共通する、為政者自身の誠実さやいさぎよさは、儒教道徳を重視する旧中国では、けっこう知識人の心をうち、民衆の共感をよんだのだろう。六朝の天子や地方官が招隠書翰を発しつづけたのは、隠者に敬意を表する伝統もさることながら、為政者みずから弱みをさらしてもかまわない、いや、むしろそちらのほうが人心収攬に効果があるとしっていたからだろう。

これを要するに、招隠書翰は、隠者や賢人への敬意や、謙虚さをおもんじるという儒教ふう美質が、よく発揮された文章だといってよい。招隠の舞台裏をみれば、隠者や為政者の実態には、いろいろ具合のわるい点もないではなかった。しかしそうだったとしても、謙虚かつ低姿勢に隠者を招聘するということは、世の人びとに有形無形の好影響をもたらしただろうし、また一篇の文学としても気もちのよい読後感をあたえるものとなった。

六朝文学を評価するにあたっては、当該の作が『文選』に採録されているかとか、『文心雕龍』がよい評価をくだしているかとか、そうした外面的な見地から判断されやすい。もちろん当代の世評に依拠するという点では、

そうしたやりかたも有効だろうが、それにくわえ、「読後感はどうか（よいかわるいか）」という見地からの評価もあってよいのではないか。そうした評価基準からみれば、本稿でみてきたような招隠書翰や罪己詔などは、もっとたかい評価をあたえてもよかろうとかんがえるのである。

注

（1）本稿でつかう「隠者」の語、類義のことばとして、ほかにも隠士、隠逸、処士、高士、逸士、幽人、逸民、逸人などがある。これらの語はまったく同義ではなく、すこしずつニュアンスがことなっているが、「仕官せず、民間や山林にかくれひそむ人びと」という点では、それほど差があるわけではない。それゆえ本稿ではとくに区別せず、適宜、当該の文脈にふさわしい語をつかった。

（2）楊暕「与逸人王貞書」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、以下の業績を参照した。張仁青『歴代駢文選』（台湾中華書局）、曹明綱『六朝文絜訳注』（上海古籍出版社）、史海陽・李竹君『六朝文絜訳注』（華夏出版社）、韋鳳娟『魏晋南北朝諸家散文選』（三聯書店）。

○山蔵美玉、光照廊廡之間――『尹文子』大道上のつぎのような話をふまえる。魏の田父が耕作中に玉をみつけた。隣人がいつわって、それは怪石であり縁起がわるいといったが、田父は家にもちかえり、長廊においた。すると当夜、その玉がひかって部屋全体をあかるくてらしたという。ここでの「美玉」は、王貞のかがやかしい才能の喩だろう。

○地蘊神剣、気浮星漢之表――『晋書』張華伝のつぎのような話をふまえる。晋が呉を征したころ、斗牛の星座のあたりに紫の気がただよっていた。そこで張華が雷煥にたずねると、［豊城の地下にうめている］宝剣の霊光が天にのぼっているのです、といった。そこで張華は、雷煥を豊城令に任じて宝剣をさがさせるや、彼は地下から龍泉と太阿という二振りの宝剣をほりだしたという。「星漢」は天の川。この「神剣」も上聯の「美玉」とおなじく、かくしてもかくし

きれぬ王貞の才能の喩だろう。

○毛遂穎脱、義感平原――「穎脱」は、袋中の錐の先端が袋の外につきでること。才気が衆人にぬきんでるの意。『史記』平原君伝につぎのような話がある。秦の攻撃をうけた趙の平原君が、楚に救援をたのもうとするや、食客の毛遂が随行したいとねがった。すると平原君は、「貴殿はこれまで、食客たち（袋）のなかで穎（錐の先端）が、外につきでる（脱）ことがなかった」としぶったという。この話により、「穎脱」は「才気が衆人にぬきんでる」の意となった。また「義感平原」は、楚との交渉に随行させた毛遂が、剣でおどしながら、楚王にせまって同盟をむすばせた行いが、平原を感動させた、の意。

○孫恵文詞、来遷東海――孫恵は西晋の人。八王の乱のとき、隠者をよそおって東海王の司馬越に書翰をおくった。それをよむや、司馬越は孫恵を臣僚にむかえた。この孫恵や張華の故事は、隋からちかい時期（ともに西晋）のものだ。伝説や秦漢の故事でなく、時代的にちかい西晋の典故をつかうのは、当時（隋）としては、新穎なやりかただったろう。

○比高天流火――この句をふくめた四句（隔句対を構成する）は、時候のあいさつを叙したもの。「流火」は、心星が七月の夜に、西の空に移動すること。転じて陰暦七月をいう。『詩』豳風七月に「七月流火ありて、九月に衣を授く」とある。

○仙掌――漢の武帝のとき、建章宮に銅柱の承露盤をつくり、その上に仙人が手のひらで盤をささげもつ形をした器物をおいた。これでもって、[太平のしるしとして] 天からくだる甘露をうけたという。

○想摂衛攸宜、与時休適――「想」は、「私が貴殿の日常をおもうに」の意であり、この句以降は、王貞の自適の日々を、推測しつつ叙している。「摂衛」は身体を大切にして養生すること。「摂養」におなじ。また「休適」は休養する。この二句、蕭統「与何胤書」にも「想うに摂養して宜しきを得、時とともに休適せん」という類似した句があり、六朝書翰に習見の用語なのだろう。

○丘壑之情――「丘壑」は丘と谷。隠棲にふさわしい場所。したがって「丘壑之情」は、隠逸したいという気もち、の

意だろう。

○蕭散煙霞之外――「蕭散」はのんびりすること。「煙霞」はここでは山林をいう。「煙霞之外」は山林のさらに外の意で、対応する「丘壑之情」と相似した、隠逸を志願するの意だろう。このあたり、楊暕は王貞を隠者とみなしていることに注意しよう。

○茂陵謝病、非無封禅之文――司馬相如が病気となって茂陵に隠棲したあと、「封禅文」をかきのこしたという故事をふまえる。『史記』司馬相如伝にくわしい。

○彭沢遺栄、先有帰来之作――彭沢とは陶淵明のこと。「遺栄」は栄華をすてる、の意。陶淵明は彭沢の令となるが、八十余日で辞して帰郷した。そのときにつづったのが、「帰去来辞」である。ここで司馬相如と陶淵明の故事をもちいたのは、両人が隠逸志向と文人気質を有していて、それが王貞とかさなるからだろう。

○優游儒雅――「優游」はゆったりする。『詩』大雅巻阿に「伴奐として爾游べよ、優游として爾休せよ」とある。「儒雅」は教養たかく、すぐれるさま。

○余属当藩屏――「余」は楊暕自身をさし、この句からは、自分のことや用件をのべている。「藩屏」は、まがき。転じて、まがきとなって帝室を守護すること。詩大雅板に「价人は維れ藩なり、大師は維れ垣なり」にもとづく。楊暕は隋煬帝の次男であり、このときは斉王に封じられ、かつ江都（揚州）に鎮していた。

○宣条揚越――「条を揚越に宣ぶ」と訓じる。条規を揚越の地に宣布する、つまり揚越をおさめている、の意だろう。

○坐棠聴訟――周の召公は棠樹のもとで、住民の訴えごとをさばいたという。『史記』燕召公世家に、「［召］公は郷邑に巡行するや、棠樹有りて、獄と政事を其の下に決す。侯伯より庶人に至るまで各おの其の所を得て、職を失う者無し。召公卒するや、民人は召公の政を思い、棠樹を懐いて敢えて伐らず、之を哥詠して、甘棠の詩を作る」とある。私（楊暕）は召公のように多忙だ、の意だろう。

○事絶詠歌――上句をうけて、私は多忙なため、甘棠の詩を詠じる暇もない、ということだろう。

○攀桂摛詞――「攀桂」は桂枝をひっぱる、の意。淮南小山「招隠士」の「桂枝を攀援して聊さか淹留す」にもとづく。「坐棠聴訟」と対応するので、ここでは「摛詞」とあわせて、筆を手にとって［政務関係の］書類をかく、の意だろう。

○眷言高遁――「高遁を眷言す」と訓じる。隠者をしたう、の意。「言」は意味なし。

○揚旌北渚――「揚旌」は旗をあげる。ここでは、旗をまきあげるぐらい馬車を疾駆させる、の意だろう。「北渚」は北のみぎわ。『楚辞』九歌湘君にもとづく。

○飛蓋西園――「飛蓋」は覆いをとばすほど、馬車を疾駆させる、の意。曹植「公宴」詩の「清夜に西園に遊び、飛蓋は相追随す」にもとづく。

○託乗乏応劉――馬車に同乗する者に、応瑒や劉楨のような才士がいない、の意。曹丕「与朝歌令呉質書」の「文学は後車に託乗す」にもとづく。

○置醴闕申穆――「置醴」は甘酒を用意する、の意。前漢の楚元王は、申公、白生、穆生らの儒者を尊敬していた。穆生は酒がきらいだったので、楚元王は宴会をひらくごとに、穆生のために甘酒を用意したという（『漢書』楚元王劉交伝）。

○背淮之賓、徒聞其語――「背淮之賓」は遠路はるばるやってくる賓客、の意。「背淮」の語は、前漢の遊説の士、鄒陽が呉王にかたった「淮を背にすること千里にして自ら致す」のことばにもとづく。この二句をあわせると、鄒陽のごとき才子が遠路はるばるやってくるようなことは、ただ話にきくだけにすぎない、という意になる。

○趨燕之客、罕値其人――「趨燕之客」は、燕昭王に臣事しようとやってきた賓客たち、の意。『史記』燕召公世家によると、燕昭王が「隗より始めよ」の忠告にしたがったところ、王のもとに賢士が殺到してきたという。「罕値其人」（其の人に値ること罕なり）は、自分（楊暕）の周辺には、燕昭王に殺到してきたような賢士はいない、ということ。

○儒墨泉海――「儒墨は泉海のごとし」と訓じ、貴殿の学問は江海のようにひろい、と解した。

○詞章苑囿――「詞章は苑囿のごとし」と訓じ、貴殿の詩文は［さまざまな鳥獣がいる］苑囿のように多彩である、と

解した。

○棲遅衡泌――「棲遅」はのんびりする。「衡泌」は冠木門と泉水。転じて隠居生活をおくる、の意。両語とも、『詩』陳風衡門の「衡門の下、以て棲遅すべし。泌の洋洋たる、以て楽しみ飢うべし」にもとづく。

○懐宝迷邦――才能をもちながら、隠棲してつかえないこと。『論語』陽貨の「其の宝を懐きて其の邦に迷う。仁と謂うべきか」にもとづく。

○於邑――うれえる。『楚辞』九章悲回風の「傷み太息して愍憐す。気は於邑して止むべからず」にもとづく。

○具宣往意――「具に往かせし意を宣せしむ」と訓じる。使者を派遣した私の思いを詳細につたえさせる、の意。

○側望起予――「側身」はつつしみねがう。「起予」は啓発する。後者は『論語』八佾の「子曰く、予を起こす者は商か。始めて与に詩を言うべきのみと」にもとづく。

○投石――「以水投石」（水を以て石に投ず）の略。水を石にかけても、石が水をはねかえすように、いかなる言説もうけいれてもらえないことの喩。李康「運命論」に「其の言うや、水を以て石に投ずるが如し。之を受くる莫きなり」とある。したがって「無信投石之談」は、「ご自身（王貞）の献言がうけいれられぬ」という議論を信じてくれるな、の意となる。

○鑿坏――「土塀に穴をあけてにげだす」の意から転じて、隠遁してつかえない、の意。『淮南子』斉俗訓に、魯君がつかえさせようとするや、顔闔は土塀に穴をあけて逃走したという故事にもとづく。したがって「空慕鑿坏之逸」は、貴殿（王貞）は隠逸を希望してくださいますな、の意となる。

○書不尽言――ことばでは思いをいいつくせない、の意。『易経』繫辞上伝の「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」にもとづき、後世、書翰文の末尾によく使用される。

（3）招隠書翰「与逸人王貞書」を執筆するにあたって、楊暕は詩文にたくみな側近（祐筆にあたるもの）に、字句の添削をしてもらったかもしれない。そしてそれは、添削以上のことだったかもしれない。ただ、そうしたことは楊暕クラスのひ

とであれば、当時だれにでもあったことである。くわえて楊暕は、［臣下の勧めがあったにせよ］この書翰をおくることを決定し、そしてできあがった文章に署名したわけであり、彼がいなければこの作はかかれなかったはずだ。その意味では、側近の添削があったとしても、楊暕のプライオリティーはみとめられてよかろう。それゆえ以下では、楊暕の作として議論をすすめることにする。本稿でとりあげる他の文書も、明確にだれそれの代作とわかるもの以外は、おなじあつかいにするので、ご了承いただきたい。

（4）六朝美文書翰における三段構成については、拙稿「六朝書簡文の書式について―昭明太子十二月啓を中心に―」（「中国詩文論叢」第八集　一九八九）を参照。

（5）楊暕「与逸人王貞書」の構成に似たものとして、作者未詳の書簡文例集、「十二月啓」の「無射九月」があげられる。それは、

◎ふるくからの親戚や朋友、また日ごろの良友のあいだでは、「人生に浮沈の別があれば、ひとは雲と雨のごとくわかれてしまうものだ」とは、かんがえません。友情あつき「伐木」の声をひびかせ、貧友との交遊をさけぬ「采葵」の歌をうたいつづけます。

①さて昨今は重陽をむかえて時節がかわり、風物も秋の深まりを感じさせます。霜は樹をおおって枝までつつみ、風は林にふきつけ葉をおとします。堅固な堤にならぶ翠柳は、星光にかがやきながら整然とならび、北方の要塞のうえをとぶ蒼鴻は、景色をおいかけながら隊列をくんでいます。

②つつしんで貴兄の日常を推察しますに、秀英ぶりは「東箭」より目だち、評判は「南金」よりたかいことでしょう。また貴兄の才能たるや、色あざやかな鳥をのみこんだ羅含の名声をしのぎ、また徳望たるや、蛟龍が懐にとびこんだ董仲舒の叡知にもまさっております。

③さて小生は、陋屋にすむいやしき民、やぶれ窓にたたずむ雑輩にすぎません。白馬の論もたてられず、碧鷄の弁舌もありません。ただ、たがいに離別して別処にいるのをなげき、お会いしようにも予定がたたぬのを、かなしむば

かりです。いささか無官者の言を叙して、貴兄の成功をねがう微意をのべたしだいです。

という文章だ（この文の原文やくわしい注解は、拙稿「十二月啓訳注―六朝書簡論―」〈「中京大学文学部紀要」第四三―一号　二〇〇八〉を参照のこと）。

これは九月、つまり晩秋用の模範文例である。「陋屋にひそむいやしき民、やぶれ窓にひそむ雑輩」が、才知すぐれし友人に面晤の機会をねがった、という設定でかかれている。この文例にも、①～③の数字を附しておいたが、その構成や内容は、本文の「与逸人王貞書」とよく似ている。すなわち両篇とも、「①時候のあいさつ、②相手のようす、③自分の近況（用件）」という三段から構成されている。そして冒頭の◎の部分は付録ふう字句であり、③の用件の先ぶれというべき故事提示である――という点で共通しているのである。この「無射九月」の作者は、おそらく各種の六朝書翰を参照しながら（ひょっとしたらこの楊暕書翰をこそ、参照したのかもしれない）、この文例をつくったのだろう。

（6）求賢詔については、李莉「従唐前求賢詔看古代帝王求賢的心理和標準」（「南京師範大学文学院研究生研究成果専欄」二〇一〇）、李乃龍「論漢武帝求賢詔的風範」（「広西師範大学学報」二〇〇九―三）などの研究を参考にした。

（7）両晋の隠者やその実態については、つぎの両書を参考にした。小林昇『中国・日本における歴史観と隠逸思想』（早稲田大学出版部　一九八三）の後篇「一　朝隠の説について―隠逸思想の一問題―」、石川忠久『陶淵明とその時代』（研文出版　一九九四）の内篇「第二章　陶淵明の帰田」。また、両晋をふくめた六朝の隠逸思想については、神楽岡昌俊『中国における隠逸思想の研究』（ペリカン社　一九九三）を参考にした。

（8）西晋における、「道義をかたるひと」としての隠者像については、丹羽兌子「皇甫謐と高士伝―隠逸者の生涯―」（「名古屋大学文学部研究論集（史学）」第五〇号　一九七〇）を参照。

（9）後漢期の隠者やその実態については、大室幹雄『桃源の夢想―古代中国の反劇場都市』（三省堂　一九八四）の「第六章　隠者の社会学」を参考にした。

（10）詔の文章の構成については、拙著『六朝文体論』第七章（汲古書院　二〇一四）を参照。

（11）たとえば、小尾郊一『中国の隠遁思想』（中公新書　一九八八）の「二、隠遁のはじまり」では、隠者発生の経緯をわかりやすく説明してくれている。

（12）招隠書翰に関係した為政者として、梁武帝以外では、南斉の竟陵王こと蕭子良（四六〇～四九四）があげられよう。この蕭子良は、帝位にはのぼらなかったが、学問好きの皇族として著名な人物だった。彼もおおくの文人を周辺にあつめて、鶏籠山の西邸で文雅な集いをしばしばひらいた。そこにあつまった文人のなかでは、とくに「竟陵八友」（蕭衍、沈約、謝朓、王融、蕭琛、范雲、任昉、陸倕）が著名である。そうした竟陵王配下の文人が、隠者を自分の主人（蕭子良）のもとにまねこうとしてかいた書翰文も、この招隠書翰のなかにいれてよいかもしれない。王融の「為竟陵王与隠士劉虬書」や庾杲之「為竟陵王致書劉隠士」、任昉「為庾杲之与劉居士虬書」などが、それである。

（13）本稿では、謝朏を隠者でなく高士と称するが、これは彼を隠者とは断じにくいからである。というのも、謝朏は生涯ずっと出仕しなかったのではなく、ときに仕官し、ときに致仕するなど、変転きわまりない進退をおこなっているからだ。この沈約「為武帝与謝朏勅」では隠者とされているが、それは、この勅が発せられた時期、彼がたまたま仕官していなかったので、武帝から隠者と遇されているにすぎない。そもそもこの梁代においては、朝隠（本文を参照）という奇妙な隠逸のしかたも発生しており、この時期の隠者と非隠者との区別は、そうそう簡単ではない。そこでとりあえず、謝朏を［隠者でなく］高士と称することにした（次節で引用する何胤をまねいた招隠書翰でも、本稿では何胤を高士と称した）。

（14）沈約「為武帝与謝朏勅」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、以下の業績を参照した。曹明綱『六朝文絜訳注』（上海古籍出版社）、史海陽・李竹君『六朝文絜訳注』（華夏出版社）、王文濡『南北朝文評注読本』（広文書局）。

○属当期運――「属（たま）たま期運に当（あ）たる」と訓じる。「期運」は時のめぐりあわせ、の意。蕭衍が時運にあたって践祚したことをいう。ここでは、「菲徳」でありながら「期運」によって天子に即位することができたと、謙遜して表現している。

○鑒与吾賢――「与吾賢鑒」（吾が賢とともに鑒（かんが）みる）の倒置と解する。訓読すれば「鑒みるに吾が賢と与（とも）にす」となろ

う。わが賢人たちとともに前言往行をかんがえる、の意。

○賢能――賢人と能力ある者。『尚書』武成の「官を建つるは惟れ賢、事に位するは惟れ能なり」をふまえるか。

○山林之志、上所宜弘――「山林之志」は隠逸の志、「上所宜弘」は為政者が宣揚すべきこと、の意。為政者が隠逸の志を尊重することは、堯帝が許由を敬重して以来、伝統的な考えかただといってよい。

○激貪厲薄――貪婪さをおさえ、軽薄さをただす。

○執文経武――「文を執り武を経むるひと」と訓じる。「経武」は『左氏伝』宣公十二年の「子は姑く軍を整へ武を経めんか」にもとづく。

○羣才競爽――「羣才の競爽なる」と訓じる。「競爽」はつよく聡明である、の意。『春秋左氏伝』昭公三年に「二恵競爽なれば、猶お可なり」とある。

○厥職――任務としてやるべき政務。『尚書』胤征に「羲和厥の職を廃し、厥の邑に酒荒す」とある。

○和美――なごやかであり、またりっぱである。『論語』学而の「礼の用たるや、和を貴しと為す。先王の道、斯を美なりと為す」にもとづく。

○鎮風静俗――風俗を改善する。「○風△俗」（風を○し俗を△す）の語はいくつかあり、そのひとつ。もともとの出典は、おそらく『礼記』楽記の「風を移し俗を易へれば、天下皆な寧し」だろう。

○変教論道――上句との関連からすれば、「教えを変じ道を論ず」と訓じるのだろうが、出典は未詳。ちかい用例として『戦國策』趙策に「古の教えを変え、古の道を易へる」がある。

○箕潁高人――隠者のこと。「箕潁」は箕山と潁水のことで、許由が隠棲した地をさす。「高人」は志行すぐれた人物。ここではおそらく謝朏をさして、こういったのだろう。

○莫膺茲寄――「茲の寄するを膺くる莫し」と訓じる。貴殿（謝朏）以外には、この任務をまかせることができない。旧時では、隠者は民衆の風俗をあらため、教化の実をあげることができると、おもわれていたようだ。

○虚心側席――「心を虚しくし席を側む」と訓じる。直訳すれば、わだかまりなく、貴殿のために座席をあけている、の意。「虚心」は『老子』の「聖人の治むるや、其の心を虚しくし、其の腹を実たし、其の志を弱くし、其の骨を強くす」にもとづく。「側席」は、賢人を厚遇しようとして身を片側によせて席をあける、の意。『後漢書』章帝紀に「朕は直士を思ひ遅ち、席を異聞に側む」などとあり、用例はおおい。

○属想清塵――「想ひを清塵に属す」と訓じる。「清塵」はきよらかな人がらの意で、ここでは婉曲に謝朏をさすのだろう。

○屈茲独往、同此濡足――「茲の独往を屈し、此の濡足を同じくす」と訓じる。あなたの独行したい気もちをおさえ、私とともに足をぬらし、よごしてほしい、の意。下句は、婉曲に「私の治世に協力してほしい」とのべたのだろう。

○釋蘿襲袞――隠者の服をぬぎ礼服を身にまとう。隠者をやめて仕官する、の意。

○湯有慙徳――「慙徳」は自分の不徳を恥じる、の意。『尚書』仲虺之誥に「成湯は桀を南巣に放つも、惟れ徳に慙ずる有り」とある。

○武未尽善――「未尽善」は完璧ではない、の意。『論語』八佾の「[子は]武を謂ひて、美を尽くすも、未だ善を尽くさざるなりと」にもとづく。舜は禅譲で天下をえたので完璧だが、周武王は武力で殷をたおしたので、善を尽くしていない、ということ。

○不降其身、不屈其志――『論語』微子の「子曰く、其の志を降さず、其の身を辱しめざるは、伯夷叔斉か」にもとづく。沈約はここで、典拠の字を別字におきかえているのに注意。なお孫徳謙『六朝麗指』三十一節は、沈約が『論語』の字を適宜いれかえたり、別字におきかえたりしたのは、沈約が修辞的意図をもって改変したものだと、好意的に評している。

○璧帛――璧玉と絹。珍奇な礼物。為政者が隠者をまねくときに、よくこれを恵与した。

○蒲輪――蒲葉で車輪をつつんだ馬車。為政者が隠者をまねくときに、よくこれをさしむけた。なお孫徳謙『六朝麗指』

五十九節は、ここの「璧帛虚往↔蒲輪空帰」二句をとりあげ、対偶中で「往」と「帰」をつかって同字重複をさけているのは、意識した技巧であるという（「虚」と「空」をつかったのも、おなじ意図によったものだろう）。ただ、こうした同字重複の忌避は、六朝文人に共通したくふうであって、沈約だけの技巧というわけではない。

○望兼立表――「望み兼ねて表を立つ」と訓じる。「立表」は日時計をたてる、の意。ここでは、陸機「思帰賦」の「霊暉の景を促すを顧み、恆に表を立てて以て之を臨む」をふまえて、「貴殿のお越しを遠望し、また日時計をたてて［時間を気にしながらまちつづけて］いる」の意だろう。

○羲軒――羲は伏羲、軒は軒轅氏こと黄帝をいう。

○総駕崆峒、依風問道――「総駕」は車馬をはしらせる。「崆峒」は空同におなじで、山名のこと。『荘子』在宥に「黄帝立ちて天子と為ること十九年、令天下に行はる。広成子は空同の上に在りと聞き、故に往きて之に見えて曰く、我は吾子の至道に達せるを聞く。敢へて至道の精を問わん」とあるのをふまえる。「依風問道」は典拠があるかもしれぬが未詳。

○引領――首をながくしてまつ。『左氏伝』成公十三年に「君の嗣ぐに及ぶや、我が君の景公は領を引き西のかた望みて曰く、庶はくは我を撫せんことをと」とある。

○虚己――自己を無にする。『荘子』山木に「人能く己を虚しくして以て世に遊べば、其れ孰か能く之を害さんや」とある。

○紆賢之愧――「紆賢」は、賢人のあなた（謝朏）を強引に招聘したという恥、の意。「紆」は「詘」（無理に招聘する、の意）だろう。なお孫徳謙『六朝麗指』七十節は、ここで「紆」字をつかったのは、沈約の錬字のくふうの結果であると、好意的に評している。

○載結寝興――「載ち寝興に結ぶ」と訓じる。『詩』秦風小戎の「言に君子を念ふ、載ち寝ね載ち興く」。

（15）梁武帝「与何胤書」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、『二十四史全訳　梁書』（漢語大詞典出版社）

の中国語訳を参照した。ただ結果的に、この中国語訳とはそうとうちがった訳文になった。

○想恒清豫――「想うに恒に清豫にして」と訓じる。「想」は「私が先生の日常をおもうに」の意であり、この句以後で、何胤の自適の日々を、推測して叙している。すると、書翰の三段構成からすれば、これよりまえに、時候のあいさつを叙した句があったはずだ。『梁書』何胤伝は、それを略して引用したのだろう。「清豫」は快適である、の意。王羲之尺牘に「寒厳なり。足下は何如ぞや。想うに清豫ならんのみ」などとある。

○致足歓也――曹丕「与呉質書」の「元瑜の書記は翩翩として、致は楽しむに足るなり」の下句を、すこしかえたものか。

○外労物役――この句は、上句との関係で判断すると、「外は物役に労せらる」でなく、「外は物役を労う」と訓読すべきだろう。

○履候無爽――「履候」はあまり用例をみないが、時候をふみて季節がすぎてゆく、の意か。「無爽」は書翰習見の語で、たがうことがない、の意。するとこの句は、時候が変化しても、その変化とたがうことがない、つまり季節の変化に順応して、元気にすごしている、の意となろう。

○悟言素対――妻と話をする。「悟言」はむかいあって話をする、の意。『詩』陳風東門之池に「東門の池、以て菅を漚すべし。彼の美なる淑姫、与に晤言すべし」とある。「素対」は配偶者の意。

○傾首東顧、曷日無懐――姿をあおぎつつ東望し、したわぬ日々がなかった、の意。この二句、だれを東望し、だれをしたわぬ日々がなかったのだろうか。「先生（何胤）のことを」ととれなくはないが、直前の二句（悟言素対、用成睽闋）との関係で、「妻（素対）のことを」と解した。そう解すると、かなり率直な発言だということになる。あるいは、かるいユーモアなのかもしれない。

○歓遇――「遇うを歓ぶ」と訓じる。私（蕭衍）は、先生（何胤）とであえたことをよろこぶ、の意と解する。

○曳裾儒肆――「儒肆」は太学。太学に裾を曳くというのは、学校で勉学にはげむことをいうのだろう。すると蕭衍は

当初、学問を指向していたのかもしれない。

○臥遊――山水の画をみて実地の遊覧に代える、の意。ここでは「畋漁」と対しているので、おそらく読書に専念する、の意でつかっているのだろう。

○仍離屯故――「仍りて屯故に離う」と訓じる。「屯故」は厄難の意。「屯」は『易』の六十四卦の一で、外にでにくい、の意。転じて「屯難」「屯厄」などの語ができた。この「屯故」もその類だろう。

○投袂――発奮する。『左氏伝』宣公十四年に「楚子之を聞きて、袂を投じて起つ」とある。

○清襟素託――「[心を]清襟に素より託す」と解する。高潔な精神をいだく、の意。「清襟」はきよらかな襟から、転じて高潔な精神を意味する。

○俯拾青組――「俯して青組を拾う」と訓じる。官爵をさずけられる、の意。

○脱履朱黻――履をぬぐように官爵をすてる、の意だろうが、文法的には、そう解するのは困難である。上句の「俯して青組を拾う」と対応させれば、「脱ぎて朱黻を履のごとくす」と訓じるべきだろうが、ややくるしい句法である。孔稚珪「北山移文」の「万乗を履にして其れ脱するが如し」を模したのだろうか。

○用捨――「用行舎藏」の略。任用されれば尽力し、されなければ隠棲する。出処進退をわきまえている、の意。『論語』述而の「之を用ふれば則ち行ひ、之を舎つれば則ち蔵る」にもとづく。

○隨時――時の流れにしたがう。『易』隨卦に「咎無く、天下時に隨う。時に隨うの義は大なるかな」にもとづく。

○独善――自分ひとりで善をたもつ。『孟子』尽心篇上の「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」にもとづく。

○今者為邦、貧賤咸恥――いまはよき治世であり、そうした時期に貧賤である者は、みな恥ずかしくおもう、の意。『論語』泰伯の「危邦には入らず、乱邦には居らず。天下道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隠る。邦に道有るに、貧しく且つ賤しきは恥なり。邦に道無きに、富み且つ貴きは恥なり」という孔子の発言にもとづく。この孔子の発言によって、

「国が平和なときには出仕し、みだれたときには隠棲すべきだ」という考えかたができた。その考えかたをふまえて、「いまは平和な時代になったので、あなた（何胤）も出仕すべきだ」とのべているのである。

○好仁由己――仁をこのむかどうかは、［他人ではなく］自分自身の意志に由来する、の意。『論語』顔淵に「仁を為すは己に由る。而して人に由らんや」にもとづく。

○候承音息――先生のようすを候い承る、の意か。

（16）梁武帝「又与何胤勅」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、『二十四史全訳　梁書』（漢語大詞典出版社）にひかれた同篇の中国語訳を参照した。

○猥当期運――「猥りに期運に当たる」と訓じる。「猥当」は謙遜した言いかた。「期運」は時のめぐりあわせ、の意。蕭衍が時運に応じて践祚したことをいう。

○楽推――よろこんで推戴する。『老子』に「聖人は上に処りても民は重しとせず、前に処りても民は害とせず、是を以て天下は推すを楽しむ」とある。

○劬労日昃――政務が繁忙であること。「劬労」は苦労する。『詩』小雅蓼莪に「哀哀たる父母、我を生みて劬労す」とある。「日昃」は昼すぎ、午後二時ごろのこと。周文王は日昃にいたるも、食事する暇がなかったという（『漢書』董仲舒伝）。

○存乎其人――政治をとるひとしだいで可否がきまる、の意。『易』繫辞上伝に「神にして之を明らかにするは、其の人に存す。黙して之を成し、言わずして信なるは、徳行に存す」にもとづく。

○改俗遷風――風俗を改善する、の意。『礼記』楽記の「風を移し俗を易へれば、天下皆な寧し」を、すこし改変した字句だろう。

○儒雅弘朝、高尚軌物――儒雅な人物が朝臣を訓導し、高尚な隠者が人びとをただす、の意と解した。

○汨流――屈原が死んだ汨羅の流れ。ここでは激流の意だろう。

○治人之与治身――「治人の治身とするや」と訓じる。「治人」は世を統治することと、「治身」は自己を修養すること。『孟子』滕文公上に「心を労する者は人を治め、力を労する者は人に治めらる」とある。

○独善之与兼済――「独善の兼済とするや」と訓じる。「独善」は自分ひとりで善をたもつことと、「兼済」はひろく天下をすくうこと。『孟子』尽心篇上の「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」にもとづく。

○屈道巌阿、共成世美――「道を巌阿に屈し、成を世美に共にす」と訓じれば対偶とみなしえる。「屈道巌阿」は、巌穴に隠棲したいという貴殿の信念をまげさせて、の意。

○深達往懐、不吝濡足――「往懐に深達し、足を濡らすを吝まず」と訓じる。

(17) 石川忠久『陶淵明とその時代』(注7参照)六十八頁に、つぎのようにある。「元来、新たな王朝が開かれる時には、その王朝を飾る道具として隠士が用いられる例が多くある。野に隠れた士にも徳沢が及ぶ、天子の徳に感じて隠士が世に出てくる、という体裁をととのえようとするものである」。

(18) 清代の許槤が謝朏のことを、「[謝朏は]また政務をみようとしなかった。そこで民衆はみな、失望したのだった」と断じたのは、おそらく『資治通鑑』巻一四五の「朏素憚煩、不省職事。衆頗失望」という記述に依拠したのだろう。

(19) ただし例外もあって、為政者が「隠者が自分の招聘に応じないのはけしからん」といっておこったり、ときには逮捕を命じたりしたケースもないではない。だが、それらは芝居めいたものがおおく、たいていは、臣下によって諫止され、最後は隠逸をゆるすという結末におちつくことがおおい。

(20) 富士正晴『中国の隠者―乱世と知識人―』(岩波新書　一九七三)八九～九〇頁にでてくることば。なお本稿のサブタイトルは、ここに引用した同書のセリフから頂戴した。

(21) 江淹「為宋建平王聘逸士教」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、以下の業績を参照した。高歩瀛『南北朝文挙要』(中華書局)、曹明綱『六朝文絜訳注』(上海古籍出版社)、史海陽・李竹君『六朝文絜訳注』(華夏出版社)、

兪紹初・張亜新『江淹集校注』（中州古籍出版社）、羅立乾・李開金『新訳江淹集』（三民書局）、丁福林・楊勝朋『江文通集校注』（上海古籍出版社）。

○府州国紀綱――「府」は右将軍の建平王（宋の劉景素）の軍府、「州」は荊州、「国」は建平王がおさめる国、「紀綱」は主簿の官。つまり建平王の主簿をつとめる江淹自身をさすことになる。

○大道――ひとのおこなうべき道とか常なる道理などの意。ここでは以下の内容からみて、「ただしき賢人登用の道」の意で使用しているようだ。

○魚潭之士――渭水のほとりで魚釣りをしていた士。ここでは、呂尚こと太公望をさす。

○棲山之夫――商山に隠棲していた四皓（東園公・綺里季・夏黄公・用里の四隠者）をさす。

○迹絶雲気、意負青天――雲のうえにでて、また青天を背にする。隠者が俗世を超越したさまをいう。『荘子』逍遙遊に「鳥有り。其の名を鵬と為す。背は太山の若く、翼は垂天の雲の若し。扶搖を搏ち羊角して上ること九万里。雲気を絶ち、青天を負ひ、然る後に南せんと図り、且に南冥に適かんとす」とあるのをふまえる。冥海にすむ鵬を描写したものだが、ここでは隠者の描写に使用している。

○絳螭驤首――「絳螭」はあかい龍。「驤首」は首をあげる。鄒陽「上書呉王」に「臣聞く、蛟龍首を驤げ翼を奮へば、則ち浮雲出で流れ、霧雨咸く集まる」とある。

○翠虬来儀――「翠虬」はみどりの龍。「来儀」はやってくるの尊敬語。『尚書』益稷に「簫韶九たび成るや、鳳皇来儀す」とある。

○税駕――車から馬をはなして、その地におちつく。「税」は「脱」に通じる。

○挹於陵之操――「於陵」は楚の地名だが、ここでは廉潔の士とされた陳仲子のことをさす。『孟子』滕文公下に「陳仲子は豈に誠の廉士ならずや。於陵に居りて、三日食はずして、耳聞こゆる無く、目見える無きなり」とある。その陳仲子の節操をしたう、の意。

○想漢陰之高――「漢陰」は漢水の南で耕作していた隠者をさす。『荘子』天地に「子貢南のかた楚に遊び、晋に反る。漢陰を過るに一丈夫を見たり」とあり、子貢とその一丈夫（隠者）との会話が記録されている。その漢陰の隠者の高節に敬服する、の意。

○流風無亡沫――隠逸の気風がなくなることはない、の意。「流風」は前代からつたわってきた気風。ここでは隠逸の気風をいう。また「亡沫」はなくなり、やまる。

○養志――たんに「志をやしなう」の意でなく、「隠逸の志をやしなう」ということだろう。『荘子』譲王に「志を養う者は形を忘れ、形を養う者は利を忘る」などとある。

○纁招――「纁」は隠者をまねくときの礼物。玄纁ともいう。それを持参して隠者をまねくこと、あるいはその使者を「纁招」という。古代においては、蒲輪の安車とともに、隠者や貴人を招聘するときの必須の小道具とされた。

○幽襟――ひそかな想い。ここでは隠者を招聘したいという私の想い、の意。

○蓬蓽――蓬門蓽戸の略。隠者の住まい。転じて隠者そのひとをさすときもある。

(22) 北朝における隠者のありかたについては、「隠者に厳しい時代」（二〇〇九年八月四日付『中外日報』社説）や池田恭哉『南北朝時代の士大夫と社会』（研文出版　二〇一八）第五章などによった。

(23) 九錫文については拙著『六朝文体論』（汲古書院　二〇一四）の第十章を参照。

(24) 両漢の罪己詔は、当時どれくらいかかれたのだろうか。郗文倩「漢代的罪己詔―文体与文化」（本文参照）によると、両漢の二十四人の天子（呂后、王莽、更始帝をのぞく）のうち、十八人がトータル八十篇もつくっているという。ちなみに本稿の第二節で、求賢詔の例としてあげた章帝「日食挙直言極諫詔」も、罪己詔だといってよい。この求賢詔と罪己詔とは、かさなりあうことがおおいのだが、しいて弁別しようとすれば、「求賢」に重点があれば求賢詔、「罪己」に重点があれば罪己詔としてよかろう。